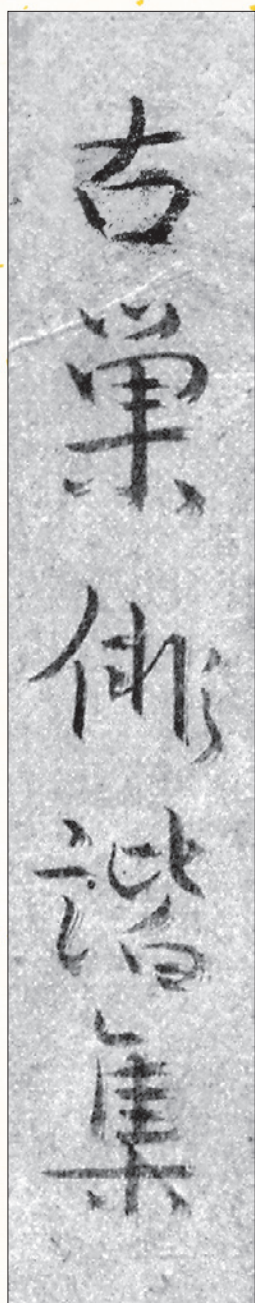


渡辺去何編『古巢俳諧集』影印と翻刻



竹内千代子 編・著

『古巢俳諧集』影印と翻刻 目次

翻刻凡例

1	安永八年	粟津浮巢庵興行	一才	3
2	安永八年十一月	膳所鈴木氏（瓜泥）興行	三ウ	7
3	安永九年十月九日	浮巢庵興行	四ウ	8
4	安永九年十月十一日	義仲寺通夜興行	六才	10
5	安永九年十月十二日	時雨会満座之後興行	七才	11
6	天明二年四月朔日	幽篁亭（塘里）興行	八才	12
7	天明二年八月六日	菊二亭興行	八ウ	12
8	天明二年八月九日	東山五升庵錢別興行	九ウ	13
9	天明二年八月十六日	丹後宮津蘭巴亭興行	一二才	16
10	天明二年九月	丹後湊於五宝氏（支白）興行	一三才	17
11	天明三年十月九日	醉茶亭（馬瓢）興行	一四才	18
12	天明三年十月十一日	芭蕉翁九十回忌逮夜 於義仲寺興行	一六ウ	20
13	天明三年十月十五日	浮巢庵興行	一七ウ	21
14	天明三年十二月	鈴木氏興行	一九才	23
15	天明五年九月六日	古巢園興行	二一ウ	25
16	天明六年十一月朔旦	但馬木姿送帰故郷賀 於五升庵興行	二三才	27
17	天明八年三月廿日	蝸牛庵（芦水）興行	二五ウ	29
18	寛政元年九月朔日	竹生島拝殿興行	二八才	32
19	寛政四年八月十一日	甲賀山杉風庵（曾秋）興行	二八ウ	32
20	寛政四年八月十三日	伊賀柘植杜音亭興行	二九ウ	33
21	寛政四年八月十六日	伊賀上野芭蕉翁古郷塚百回忌興行	三一才	35

22	寛政五年四月十二日	義仲寺百回忌百歌仙興行	三二ウ	35
23	寛政八年二月十三日	洛東岡崎泊庵満中陰通夜興行	三三才	36
24	寛政八年十二月廿三日	愛知川正覚庵幻阿上人一周忌通夜興行	三四ウ	37
25	寛政八年十二月廿四日	多賀喜雨亭(塘里)追福興行	三六ウ	39
26	寛政九年三月十四日	洛陽爾時庵興行	三九才	44
27	寛政九年四月八日	鈴木氏興行	四〇ウ	45
28	寛政九年九月九日	多賀權室(月川)興行	四二才	47
29	寛政九年十一月九日	此得・去何両吟	四五才	50
30	寛政十年二月十五日	古巢園興行	四八才	53
31	寛政十年七月十五日	宝生山知善院興行	五一才	56
32	寛政十年八月十八日	蝸牛庵興行	五三ウ	58
33	寛政十年九月廿三日	勝軍山興行	五五才	60
34	寛政十年十月十四日	宝生山知善院興行	五七才	62
35	寛政十二年六月	古巢堂興行	六〇才	65
36	寛政十二年九月尽	俊藏院夜明興行	六一ウ	66
37	享和元年十月卅日	喜雨亭興行	六五才	70
38	享和元年十一月廿三日	幻阿上人七回忌於古巢堂興行	六七才	72
39	享和二年三月	膳所若林氏(士篤)興行	六八ウ	73
40	享和二年三月廿二日	彦根如雲崖 禅直上座七回忌興行	七一ウ	76
41	享和三年正月廿五日	喜雨亭興行	七三才	78

俳人名索引

付記

『古巢俳諧集』影印と翻刻

翻刻凡例

一 本稿は、渡辺去何編『古巢俳諧集』の影印に翻刻を付したものである。

二 書誌は、写本二冊。去何自筆。安永八年から享和三年迄の俳諧を収録する。縦一九・四糎、横一三・六糎、半紙本。明治大学図書館蔵。外題は、上巻「古巢俳諧集 一」と直墨書き、題簽の剥がれ跡があり、後人の加筆で、南部晋・馬錫と推察される。下巻は題簽に墨書きで「古巢俳諧集 二」とあり、去何自筆。

三 文字は概ね現行の通行体に改める。

- ・ 振り仮名は原文のとおりとし、私に振らない。
- ・ 踊り字は原則として原文に従うが、次のように統一する。

平仮名一字、

同濁点 ゝ

漢字一字 ヲ

二字以上の繰返し

同濁点 〃

- ・ 適宜私に濁点を付し、原文にある濁点と区別しない。

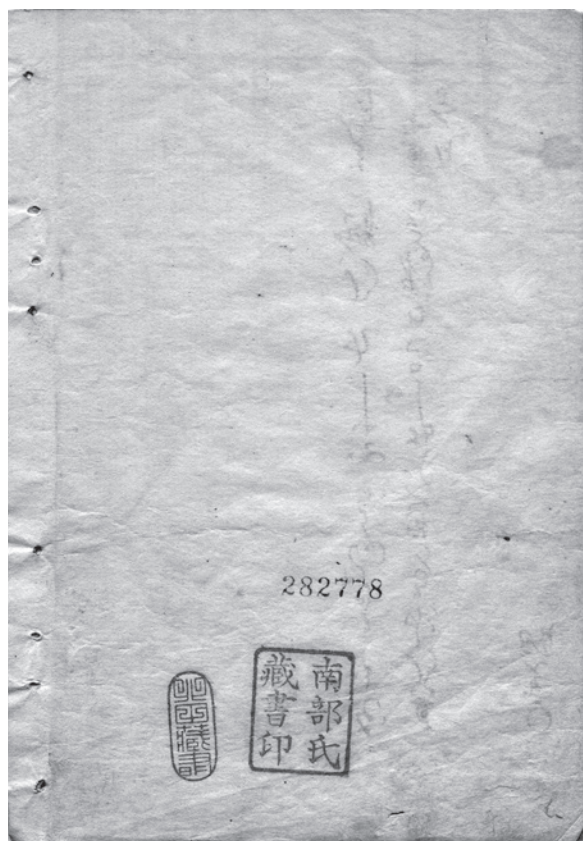
- ・ 訂正の書き込みは、原文に従って記す。

- ・ 改行は原則として原文に従うが、連句の短句は私に一字下げで統一する。

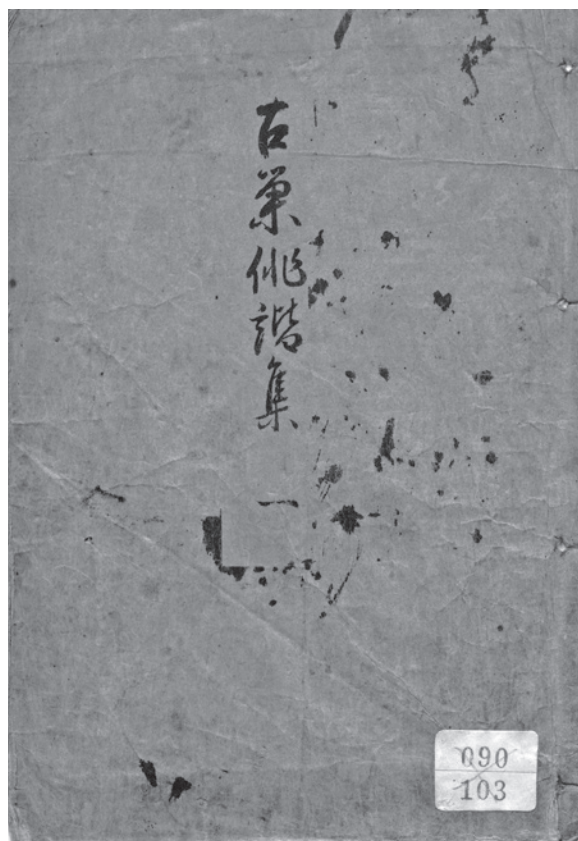
- ・ 便宜を図り興行毎の番号を私に付す。

- ・ 年次の（ ）は、私に補ったものである。

- ・ 丁数は、製本上の実数により、一、二冊の通して、（一オ）、（一ウ）などと略記する。なお、丁合のために振ってある番号は、一冊目の「十」「三十二」が重複している。



(表紙見返し)



(表紙)

古巢俳諧集
一

~~098-103~~
(2)

電真行

气

湖北の文に伊吹の初雪を告るとて

去 髭 菊 雨
何 風 二 簞

髭 沂風 髭 二 篁 髭 二 髭

(一才)

秋の螢乃ちちるるふ飛ぶ
鉢うへに葉も道とをなにし
をくはるるふは連枝の家の
酔をきくしふの膾乃びうまさ
暖きまは陣笠と脱ぐ
雨にるる云うつと西はあ
畑さうり乃多ふ河内路
新しき羅漢の像をさし荷ひ

所二髭所二、髭所
所二髭所二

木綿繻伴の襟乃粘こは
まさかりに寒夜の星のきらくと
牛盗人の跡かたもなし
あの関も女の髪をほどくとや
葉を入し文のかさ高
やうくと盃が過れば祭まへ
鯛がとれて休む村中
餅をうる小冠者有けり月のよに

、髭所二髭所二、髭所
、髭所二髭所二

秋の螢のちからなふ飛ぶ

鉢うへの蘭も筐と成けらし

花とさかふる御連枝の家

酔のき、しふかの膾の此うまさ

暖きま、陣笠を脱ぐ

雨になるか雲一つかみ西に出る

畑ばかりの多き河内路

新しき羅漢の像をさし荷ひ

木綿繻伴の襟の粘こは

まさかりに寒夜の星のきらくと

牛盗人の跡かたもなし

あの関も女の髪をほどくとや

葉を入し文のかさ高

やうくと盃が過れば祭まへ

鯛がとれて休む村中

餅をうる小冠者有けり月のよに

、髭所二髭所二、髭所 所二髭所二髭所二、髭所

(二才)

(二ウ)

ひたと鳥の枝に居直る
 庫裏の庭せんたく箸を干並べ
 百日ばかり耽わづらふ
 何所やらに肥後浪人の物堅く
 紙にそへたる箔の水引
 珍らしき発句告来し花の陰
 智月の故宅隣る長閑さ

沂 髭 青 沂 二 岨

○同冬十月於膳所鈴木氏

水仙にもうさもさ旅ごろも
 冬ごもる窓のぞくうぐひす
 捨られぬものぞと紙の雛のして
 おさなきが誉そやされにけり
 そり橋に干店かざる宵の月
 飯骨柳なども秋しなるり

行 瓜 泥 、 何 、 泥

2

○同（安永八年）冬十一月 於膳所鈴木氏

ひたと鳥の枝に居直る
 庫裏の庭せんたく箸を干並べ
 百日ばかり耽わづらふ
 何所やらに肥後浪人の物堅く
 紙にそへたる箔の水引
 珍らしき発句告来し花の陰
 智月の故宅隣る長閑さ

沂 髭 青 沂 二 岨

水仙にはゞかりもせず旅ごろも
 冬ごもる窓のぞくうぐひす
 捨られぬものぞと紙の雛のして
 おさなきが誉そやされにけり
 そり橋に干店かざる宵の月
 飯骨柳なども秋哀なり

去 何 瓜 泥 、 何 、 泥

(三才)

(三ウ)

二百里の母をおもへば肌寒き
 ひし乃人ねら矢張りしな
 畔たゝく音おもしろく牛飼て
 日は日もすがら松の花ちる
 とにかくに便さへせで弥生たつ
 小袖の紋を横に引ばる
 木曾殿の申さるゝ事通じかね
 空也の寺に初夜の鐘つく

月待て茄子に水をそぐ也
 花もる家の夫婦たらそひ
 棚もとの柱に干鰯くゝりさげ
 何ともなしに春はうれしき

○安永九子季十月九日お浮巢庵

磯ぎはの灯籠暗し鴨の声
 そよぎもやらず冬枯の萩

ッ

二百里の母をおもへば肌寒き
 むかしの人の弓矢ふかしぎ
 畔たゝく音おもしろく牛飼て
 日は日もすがら松の花ちる
 とにかくに便さへせで弥生たつ
 小袖の紋を横に引ばる
 木曾殿の申さるゝ事通じかね
 空也の寺に初夜の鐘つく

月待て茄子に水をそぐ也
 花もる家の夫婦たらそひ
 棚もとの柱に干鰯くゝりさげ
 何ともなしに春はうれしき

3 ○安永九子季十月九日 於浮巢庵

磯ぎはの灯籠暗し鴨の声
 そよぎもやらず冬枯の萩

泥、何、泥、何、泥、何、何、泥

去何 沂風

(四才)

(四ウ)

十柱香の膝むつまじく居並て
 まのふかし——新とをむむ
 月乃をふくるにつけて雨になり
 川こへて来る風のうそ寒
 刈あげし隣の稲に腰をかけ
 ひよこのさかを搔わけてみる
 ひら／＼と散し葉の包み紙
 庚申まいりはや誘ひけり

髭風 何 沂 雨石 髭 何 沂 石

(五才)

親連に手筈の内は見せられず
 向ふ鏡にうつす夏瘦
 半^ハ部に涼しくもる、月の影
 竹の中なる鳥一こゑ
 つけ出しの荷物に酒代いぢらる、
 五十を過て刀うるさき
 数ならぬ懷紙を花と奉る
 春もしぐる、冢の松かぜ

何 髭 恒女 石 髭 沂 髭 沂

(五ウ)

○同中一日義仲寺通夜

簀虫の所もかへず初しぐれ
椎の木もるゝ寒き月影
とろゝと車の轆引出して
水のましたる噂也けり
一ツ家の屋根に開ししやがの花
朝うれし氣に蝸牛這ふ

去何

髭風

蝶夢

何

髭

沂風

めきくと昨日から温泉の利て来て
膝にしたゝる簀簾の露
月共に東のかたのしらみかけ
萩ふみしだく牧のあら駒
悲しくも病きたる母の腰かゝえ
袖へおさむる護符のさかづき
そぐやうに風吹わたる寒の入
魛の舟が沖にちいさき

卷阿

夢

何

髭

夢

阿

髭

何

六

4 ○同（安永九年十月）十一日 義仲寺通夜

簀虫の所もかへず初しぐれ

椎の木もるゝ寒き月影

とろゝと車の轆引出して

水のましたる噂也けり

一ツ家の屋根に開ししやがの花

朝うれし氣に蝸牛這ふ

去何

髭風

蝶夢

何

髭

沂風

めきくと昨日から温泉の利て来て

膝にしたゝる簀簾の露

月共に東のかたのしらみかけ

萩ふみしだく牧のあら駒

悲しくも病きたる母の腰かゝえ

袖へおさむる護符のさかづき

そぐやうに風吹わたる寒の入

魛の舟が沖にちいさき

卷阿

夢

何

髭

夢

阿

髭

何

（六ウ）

（六オ）

明暮ふ古郷恋し君恋し
額乃髪をれきあぐれども
折くそほふる雨の花のかげ
柳みだるゝにしの大寺

○同土日雨会満座之後

粥に物書てさますや冬籠
雪ひつそりと笠叩く音

山川も唯よき程に隔りて
杉苗伏せし畑一枚
洗ふたるやうに今宵は月のはれ
踊がしゆんで酒を飲さる
踊ゝ志かんて酒を飲さる
秋の聲籟出すは誰人やらん
供のおとこのなく犬を追ふ
びかゝと槇の板戸の光るなり
はな橘の匂ふ一もと

明暮に古郷恋し君恋し

額の髪のかきあぐれども

折くそほふる雨の花のかげ

柳みだるゝにしの大寺

5
○(安永九年十月) 十二日 時雨会満座之後

粥に物書てさますや冬籠

雪ひつそりと笠叩く音

山川も唯よき程に隔りて

杉苗伏せし畑一枚

洗ふたるやうに今宵は月のはれ

踊がしゆんで酒を飲さる

秋の聲籟出すは誰人やらん

供のおとこのなく犬を追ふ

びかゝと槇の板戸の光るなり

はな橘の匂ふ一もと

何 沂

夢 澄

卷阿

浮流

東走

髭風

呉琴

杜音

去何

師由

蝶夢

阿

(七才)

(七ウ)

下略

○天明二寅年四月朔日於幽篁亭

背戸も門も日にます桑の茂り哉
いざかんこ鳥きかせ申さん
旅の空よしある人とたのしみて

下略

○同八月六日於菊二亭

夕飯に蚊の遠のくやはつ嵐
二日の月のうつるうち盤
刈入し稲大かたに代^シなして
もの見にありく人のそばつき
曇りてはあれど降まい槌^シ気しき
並びてきよく咲し白芥子

下略

6 ○天明二寅年四月朔日 於幽篁亭

背戸も門も日にます桑の茂り哉
いざかんこ鳥きかせ申さん
旅の空よしある人とたのしみて

下略

7 ○同(天明二年)八月六日 於菊二亭

夕飯に蚊の遠のくやはつ嵐
二日の月のうつるうち盤
刈入し稲大かたに代^シなして
もの見にありく人のそばつき
曇りてはあれど降まい槌^シ気しき
並びてきよく咲し白芥子

(八才)

(八ウ)

業^ウわひの片手に医者を心かけ
 飼^ブおく猪^ブ乃落てかはゆき
 線香の消たる跡は真^ンの闇
 過し若氣の言甲斐もなし
 青く衣かけ柳みどり立
 風呂しきさばく猿舞し共
 羽織着て男はつれぬ朧月
 小さき道がいかい事ある

何 二 何 、 二 、 何 、
 何 二 何 、 二 、 何 、
 何 二 何 、 二 、 何 、

石灰の俵をおろす山の裾
 花に日ざしの冬ならぬかな
 盃にめでたき旅出ほのめかせ
 三里すえたる心しつかり

何 二 何 二
 何 二 何 二
 何 二 何 二

○同九日お東山五升庵銭別興行

庵主の旅立たまふに随侍の子もあれば
 右ひだり叢わけよ萩の花

鯉遊
 (九ウ)

8

○同(天明二年八月) 九日 於東山五升庵銭別興行

庵主の旅立たまふに随侍の子もあれば

右ひだり叢わけよ萩の花

鯉遊

(九ウ)

(九オ)

けふととも宵月の頃
 行くる人への一声うれし気に
 腰の瓢のたぶつきにけり
 長雨の降あがりたるぬかり道
 蠅のいぶせき問丸が門
 恋なれや入^{スミ}癒しあふあら男
 襷はづせと妹にたはぶれ
 きらくと茶碗の欠けにおく霜の

馬も横むく加茂の川風
 今更に捨所なきみどり子を
 する墨嗅く物ぞ悲しき
 つるくと籬へだてる月の影
 をれて下りし芭蕉一枚
 老僧の出ありく秋となりけり
 風義を乱す美濃の講衆
 世中の折目高なる花の春

行くる、とも宵月の頃

わたり鳥今の一声うれし気に

腰の瓢のたぶつきにけり

長雨の降あがりたるぬかり道

蠅のいぶせき問丸が門

恋なれや入^{スミ}癒しあふあら男

襷はづせと妹にたはぶれ

きらくと茶碗の欠けにおく霜の

馬も横むく加茂の川風

今更に捨所なきみどり子を

する墨嗅く物ぞ悲しき

つるくと籬へだてる月の影

をれて下りし芭蕉一枚

老僧の出ありく秋となりけり

風義を乱す美濃の講衆

世中の折目高なる花の春

去何

髭風

遊風

蝶夢

雨篁

遊何

夢遊

篁遊

風遊

何風

風

何

風

何

風

(二〇才)

(二〇ウ)

宮もくもぬも蘭乃来ふ標
 宮もまゝく雀乃小きうさ
 うつゝなき身もうき人のゆへ
 百までも何をたのみのいく葉
 あつまで涼し富士の雪解
 まゝと横たふ築のことし竹
 ひかりかゞやく観音の像
 惟喬のみこと申がおはしまし

何遊何風夢遊何、
 何遊何風夢遊何

汐風わたる月の曙
 麴室そつと覗けば梅匂ふ
 布子のはゝる十徳の袖
 強弓と呼れし事も恥かしく
 柴舟かよふ宇治の山もと
 東から南をさして鶴の行
 めでたき夢の二つ重なる
 わが思ひ人に語るも面ぶせ

何遊何風夢遊何、
 何遊何風夢遊何

宮もわら家も蘭采に標

鶯にまじる雀の小ざかしさ

うつゝなき身もうき人のゆへ

百までも何をたのみのいく葉

ながれて涼し富士の雪解

青く横たふ築のことし竹

ひかりかゞやく観音の像

惟喬のみこと申がおはしまし

汐風わたる月の曙

麴室そつと覗けば梅匂ふ

布子のはゝる十徳の袖

強弓と呼れし事も恥かしく

柴舟かよふ宇治の山もと

東から南をさして鶴の行

めでたき夢の二つ重なる

わが思ひ人に語るも面ぶせ

何遊何風夢遊何、 何遊何風夢遊何

(一一才)

(一一ウ)

帝福とさうてさる石端
隠家もさ途なほさ花の雲
ふき来松も翠より花
風 夢 風

○同十六日於丹後宮津蘭巴亭興行

蝶夢

旅に病でいざよふ月の宿かな
屏風たゝめば秋の海づら
鵲の声跡に小鳥の羽ちりて
蝶夢 百尾 跨山

竹にほとく雪する也
干物の筵に道も狭うなり
猫につけたる槌のころつく
色くと遊び侘たる春の日に
水にひたして陽炎のたつ
かしこげに鮎くむ男立まはり
美濃は殊さら石高き国
制札の板もいつしか反かへり
馬吹 東陌 去何 麦宇 路景 里秋 蘭巴 鷺十

紙燭をさしてさがす爛鍋
隠家も首途がましき花の雲
二郎兵衛松も翠たつ頃

風 夢 風

9 ○同(天明二年八月) 十六日 於丹後宮津蘭巴亭興行

旅に病でいざよふ月の宿かな
屏風たゝめば秋の海づら
鵲の声跡に小鳥の羽ちりて

蝶夢 百尾 跨山

竹にほとく雪する也
干物の筵に道も狭うなり
猫につけたる槌のころつく
色くと遊び侘たる春の日に
水にひたして陽炎のたつ
かしこげに鮎くむ男立まはり
美濃は殊さら石高き国
制札の板もいつしか反かへり

馬吹 東陌 去何 麦宇 路景 里秋 蘭巴 鷺十

(一二才)

(一二ウ)

朝うせきく神うつるそ 春枝
僧達の鼻つふよきて鐘を待 志風

下略

○同九月丹後湊か五宝氏

鱸つる竿の光りや夕日の間 去何
色としもなき砂山の秋 支百
菊の酒あつまる男女とりぐに 麦宇

月ともしらず灯かゝげて 其白
あちこちへ声行ちがふ郭公 蝶夢
うへ田の面の風みどり也 百
見送ればうき人も又ふり返り 何
残せし太刀のつかのまの恋 宇
ほちくと雫したゝる垣の蔓 白
寒だけ立し梅迫の里 夢
下略

10 ○同(天明二年) 九月 丹後湊於五宝氏

朝かぜ寒く神かへるそら 春枝
僧達の鼻つきよせて鐘を待 志風

下略

鱸つる竿の光りや夕日の間 去何
色としもなき砂山の秋 支百
菊の酒あつまる男女とりぐに 麦宇

月ともしらず灯かゝげて 其白
あちこちへ声行ちがふ郭公 蝶夢
うへ田の面の風みどり也 百
見送ればうき人も又ふり返り 何
残せし太刀のつかのまの恋 宇
ほちくと雫したゝる垣の蔓 白
寒だけ立し梅迫の里 夢

下略

(一三才)

(一三ウ)

○天明三卯季十月九日 於醉茶亭

木がらしにたつや二王の力瘤
陀羅尼の聲のもる、雪垣
溜池の水しらぐと夜の明て
股引はけばこゝろ定まる
月の為筆と紙とはわすれまじ
戸棚明るといと鳴やむ

何風 馬瓢 里秋 去何 風瓢

いつととも木曾の親この椽くれて
悦ぶ事も老は泣かる、
武士の長き刀をひねくりつ
櫓びやうし立て沖へ出る舟
風の後はる、紀の路のわかば山
恋歌に結ふ短夜の月
小侍従と召れし事も一むかし
草にかくる、塚のつくばひ

何風 風瓢 風瓢 何風 風瓢 何風

11 ○天明三卯季十月九日 於醉茶亭

木がらしにたつや二王の力瘤
陀羅尼の聲のもる、雪垣
溜池の水しらぐと夜の明て
股引はけばこゝろ定まる
月の為筆と紙とはわすれまじ
戸棚明るといと鳴やむ

何風 風瓢 風瓢 何風 風瓢 何風

いつととも木曾の親この椽くれて
悦ぶ事も老は泣かる、
武士の長き刀をひねくりつ
櫓びやうし立て沖へ出る舟
風の後はる、紀の路のわかば山
恋歌に結ふ短夜の月
小侍従と召れし事も一むかし
草にかくる、塚のつくばひ

何風 風瓢 風瓢 何風 風瓢 何風

(一四才)

(一四ウ)

木兔の昼はまじく目も明て
降にもあらず打曇る空
百姓のせはしき頃の花ざかり
塩ものあぶる庭の陽炎
春ふかく祭の太鼓叩たて
奈良からわせし嫁を見たがる
縁端ナに青きつづりをかたみ刺
馬頼もしの餅にきはまる

瓢 秋 風 何 瓢 秋 風 何 瓢 秋 風 何 瓢

ぐさくと足駄の沈むぬかり道
油の徳利繩にからげて
疱瘡も翌は大かたかせしまふ
洗ひ米して梶の葉にもる
月はとく入て明るき星のかげ
わたりおほせし秋の川水
僧連に二もの杉尋ねばや
たゞひたすらに好む画の道

瓢 秋 風 何 瓢 秋 風 何 瓢 秋 風 何 瓢

木兔の昼はまじく目も明て
降にもあらず打曇る空
百姓のせはしき頃の花ざかり
塩ものあぶる庭の陽炎
春ふかく祭の太鼓叩たて
奈良からわせし嫁を見たがる
縁端ナに青きつづりをかたみ刺
馬頼もしの餅にきはまる

瓢 秋 風 何 瓢 秋 風 何 瓢 秋 風 何 瓢

ぐさくと足駄の沈むぬかり道
油の徳利繩にからげて
疱瘡も翌は大かたかせしまふ
洗ひ米して梶の葉にもる
月はとく入て明るき星のかげ
わたりおほせし秋の川水
僧連に二もの杉尋ねばや
たゞひたすらに好む画の道

瓢 秋 風 何 瓢 秋 風 何 瓢 秋 風 何 瓢

(一五才)

(一五ウ)

すうくと風吹あぐる竹簀子
研並べたる庖丁の色
此たびの夢はのがさぬ福の神
鎌くら通ひ荷物つけ出す
花の雲湖の北べら南べら
としぐに來る雀燕

何 瓢 何 風 秋 筆

○同十月十一日芭蕉翁九十回忌速夜於義仲寺

月しぐれ昔をながむ今宵かな
千鳥まじをに哀そふ声
つかね藁大文字書かん筆ゆふて
三代続く名をもらふ也
枝たる、槐の下の塀地門
笛のしらべもや、乙に入る

青蘿 蝶夢 素兄 其白 布舟 飯興

(一六才)

(一六ウ)

まやあんとちよきよいさみ立
 瓦全
 海くさき傍輩の衆
 塘里
 珍らしく晴わたりたる御生^{ミエ}の日
 去何
 ながるゝ水にうごく萱の葉
 巨洲
 道ゆくも馬にのらねばはかどらず
 塘雨
 おもはぬ人に顔を見合す
 髭風
 弾損じまじものと琵琶抱上て
 菊二
 海風通る福原の町
 瓜泥

桜はしらけ花紅るに咲匂ひ
 露光
 いづれ弥生後の如月
 下略

○同(天明三年十月) 十五日 於浮巢庵

遊びたき心も寒き小春哉
 去何
 たゞいろいろに瓶の水仙
 髭風
 折妻戸さては留守ぞと跡しめて
 瓜泥

ヤナ

13 ○同(天明三年十月) 十五日 於浮巢庵

(二七才)

(二七ウ)

半^ハカ^ハくち^ハ木^ハ乃^ハ石^ハに成^ハけり 文^ハ耕^ハ
 夕^ハ月^ハ夜^ハぬ^ハく^ハき^ハ温^ハ泉^ハの^ハ山^ハお^ハろ^ハし 雨^ハ石^ハ
 鯉^ハも^ハう^ハれ^ハば^ハ田^ハ楽^ハも^ハう^ハる 蝶^ハ夢^ハ
 とこ^ハま^ハでも^ハ関^ハの^ハ角^ハ力^ハの^ハ沙^ハ汰^ハば^ハかり 青^ハ岬^ハ
 ま^ハ天^ハとい^ハふ^ハ日^ハは^ハす^ハく^ハな^ハけれ 何^ハ
 ひ^ハた^ハく^ハと^ハさ^ハ浪^ハよ^ハす^ハる^ハ富^ハ士^ハの^ハ影^ハ
 う^ハり^ハの^ハ契^ハり^ハに^ハ宿^ハを^ハ立^ハゆ^ハく 風^ハ
 を^ハだ^ハ巻^ハを^ハつ^ハけ^ハて^ハ見^ハた^ハら^ハば^ハい^ハか^ハなら^ハん 岬

土^ハ用^ハの^ハ明^ハ乃^ハ月^ハの^ハ涼^ハし^ハき 耕^ハ
 二^ハ三^ハ本^ハ柱^ハも^ハな^ハる^ハか^ハし^ハら^ハ竹 何^ハ
 木^ハ戸^ハ口^ハせ^ハま^ハき^ハ餅^ハ飯^ハ殿^ハ町 夢^ハ
 ほ^ハろ^ハく^ハと^ハ豆^ハの^ハに^ハら^ハる^ハ音^ハの^ハし^ハて 泥^ハ
 宵^ハか^ハら^ハ更^ハる^ハ春^ハ雨^ハの^ハさ^ハま 二^ハ
 下^ハ枝^ハを^ハく^ハり^ハ揚^ハた^ハる^ハ陰^ハの^ハ花 石^ハ
 牛^ハの^ハ背^ハ中^ハに^ハ眠^ハる^ハ蝶^ハ々 岬

よて

半カバくち木の石に成けり

夕月夜ぬくき温泉の山おろし

鯉もうれば田楽もうる

どこまでも関の角力の沙汰ばかり

青天といふ日はすくなけれ

ひたくとさゝ浪よする富士の影

かりの契りに宿を立ゆく

をだ巻をつけて見たらばいかならん

土用の明の月の涼しき

二三本柱にもなるかしら竹

木戸口せまき餅飯殿町

ほろくと豆のにらる、音のして

宵から更る春雨のさま

下枝をく、り揚たる陰の花

牛の背中に眠る蝶々

文耕

雨石

蝶夢

青岬

何

夢

風

岬

耕

何

夢

泥

二

石

岬

(一八才)

(二八ウ)

○同十二月於鈴木氏

灯火の何にはぜるぞ霜の宵
長炉にこぞり廿日月まつ
故郷は山のあなたに隔りて
もはや舟路も半ば過たり
雁がねのそこはかとなく霞日に
酔てはじめる枝のふらこゝ

瓜泥 鯉遊 沂風 泥遊 風

十三の君もおほろに恋ごゝろ
立たり居たり向ふすがた見
往昔のまゝに出雲の神久て
木の下やみの風のすゞしき
一荷にもかろき基手の晒うり
人のうらやむ母の長寿
萩の戸に琵琶かきならす月の暮
ふりほどけつゝ、柳散こむ

泥遊 風 泥遊 風 泥遊 泥遊

14 ○同(天明三年)十二月 於鈴木氏

灯火の何にはぜるぞ霜の宵
長炉にこぞり廿日月まつ
故郷は山のあなたに隔りて
もはや舟路も半ば過たり
雁がねのそこはかとなく霞日に
酔てはじめる枝のふらこゝ

瓜泥 鯉遊 沂風 泥遊 風

十三の君もおほろに恋ごゝろ
立たり居たり向ふすがた見
往昔のまゝに出雲の神久て
木の下やみの風のすゞしき
一荷にもかろき基手の晒うり
人のうらやむ母の長寿
萩の戸に琵琶かきならす月の暮
ふりほどけつゝ、柳散こむ

泥遊 風 泥遊 風 泥遊 泥遊

(一九才)

(一九ウ)

世中の暑さも今は夢なれや
 しばし峠に湖水見はらす
 爰かしこ花の狂ひに杖曳て
 墨の袂にのぼる陽炎
 中空は雲雀囀る四つさがり
 宮うち明て甘草揃へる
 程ふりし越後の妻を思出し
 衣薄ければ風いたみする

風 蚤山 遊 泥 遊 泥 遊 泥 然 何 遊 泥 風 遊

竹縁に栗のかれ葉の落つもり
 机にはたゞ陀羅尼一卷
 粥くふて身の息災を覺たり
 子供たらしの筋を作らん
 青あらし簾のすきを音づれて
 苔の花さく露のゆふ月
 尊さに袋の幣を取出し
 友船頭の無事を念ずる

泥 何 然 遊 泥 遊 泥 風 遊

やね

(二〇才)

(二〇ウ)

河赤き空を西とも東とも
 声しはがれて旅鳥なく
 いたづらにせまる思ひに日を重ね
 伯父に逢はじと忍ぶぬりごめ
 宿かへておりく匂ふ加茂の花
 水かみきよき落合の春

龍川 然 泥 風 川 筆

○天明五丑年九月六日 於古巢園

楽くと雨に虫きく朝寝かな
 あしらひ易き月のまれ人
 海に山果なき秋も暮過て
 桶の蛇の塩に赤らむ
 へしをれば頻に匂ふ檜の木
 しをりの紙にまかせてぞ行

其白 去何 蝶夢 白 何 夢

15 ○天明五丑年九月六日 於古巢園

風赤き空を西とも東とも
 声しはがれて旅鳥なく
 いたづらにせまる思ひに日を重ね
 伯父に逢はじと忍ぶぬりごめ
 宿かへておりく匂ふ加茂の花
 水かみきよき落合の春

龍川 然 泥 風 川 筆

楽くと雨に虫きく朝寝かな
 あしらひ易き月のまれ人
 海に山果なき秋も暮過て
 桶の蛇の塩に赤らむ
 へしをれば頻に匂ふ檜の木
 しをりの紙にまかせてぞ行

其白 去何 蝶夢 白 何 夢

(二一才)

(二二ウ)

けり此鐘を又や責来る
 恋の奴を又や責来る
 ものいはず櫛笥出して髪をすき
 折敷にこぼる撫子の露
 露の声さばかりに老もせず
 鷺の声さばかりに老もせず
 親持し人の笈摺うらやまし
 露を悲しむ盆は来にけり

さらくと雲片付し月の照
 鯛の俵かつぎつれたり
 花垣の里人花を大事がり
 井楸を中にたる、山吹

夢 何 白 夢 何 白 夢 何 白 夢 何 白

(二二才)

(二二ウ)

○天明六年季十一月朔旦冬至之日

但馬木姿送歸故郷賀於五升庵

虚言つかぬ心ぞつよき雪の梅 木姿
朔旦冬至祝ふこの日は 重厚
馬櫛の油かけは解かねて 其白
細き流れに桶のたゞよふ 呉琴
関の戸を越て嬉しき月の暮 几董

味噌に新酒の酔をおさへる 巴橋
手つだふて竈ぬり替る祭まへ 曾秋
罪ゆるされし船も着なり 闌更
恥かしき顔ふり背く松あかり 月川
雨夜うらみそ錦木の数 凡十
白はへにこの頃蚕うち悩み 若翁
剃る日をいそぐ真壁平四郎 半桂
朝がほの葉ごしに残る月の弓 二柳

16

○天明六年季十一月朔旦冬至之日

但馬木姿送歸故郷賀 於五升庵

虚言つかぬ心ぞつよき雪の梅 木姿
朔旦冬至祝ふこの日に 重厚
馬櫛の油かけは解かねて 其白
細き流れに桶のたゞよふ 呉琴
関の戸を越て嬉しき月の暮 几董

味噌に新酒の酔をおさへる 巴橋
手つだふて竈ぬり替る祭まへ 曾秋
罪ゆるされし船も着なり 闌更
恥かしき顔ふり背く松あかり 月川
雨夜うらみそ錦木の数 凡十
白はへにこの頃蚕うち悩み 若翁
剃る日をいそぐ真壁平四郎 半桂
朝がほの葉ごしに残る月の弓 二柳

(二三才)

(二三ウ)

吹れて落る露の竿竹 布舟
 宮木ひく木曾の山辺の秋更で 紫曉
 七年ぶりに灸すえける 塘里
 花さけば餅をくふたる腹こゝろ 去何
 きしの菜種の水に散かふ 里秋
 雉子雲雀こゑ遠近に暮かゝり 椿華
 から輪乱して児一人なく 瓦全
 法性にかゝれる雲の跡もなし 蛙声

杉の雲のたらぬ下闇 菊二
 人音のわづかにもれて斧の音 五来
 ふし所にまよふしら浪が妻 青尙
 重ねたる綾の袖口あひもせて 巴川
 むかふ吹雪に鷹いさむ也 三敲
 焼捨て院内あらすあし鼎 暁台
 弁慶ばかり不届に寝る 青蘿
 舞の手のかざす扇に月更で 九皐

二一七

(二四才)

(二四ウ)

かきねに近う蛭啼なる
枯の水茎の岡なつかしや
馬士をすかしていそぐから尻
小座頭のものうちこぼすむら雨に
弁才天へまいる賑はひ
故郷へいまやかざせる花ごろも
春の朝日のすみやかにさす

素寮
太溪
鳴泉
倚川
履道
蝶夢
東走

○天明八申年三月廿日於蝸牛庵

岩穴に入口のもどる躑躅哉
啼かで雉子のばたくとたつ
待合に設のどらの春更て
かりし袴の裾の短かき
ひと際に蘭も匂へる月の夜に
松にかけたる松むしの籠

去何
芦水
里秋
飯興
師由
水

17

○天明八申年三月廿日 於蝸牛庵

(二五ウ)

(二五オ)

ひとつとも風呂すさまじき諏訪の宿
 孝行な子を皆が見たがる
 紅染の二布揃えし蟹乙女
 ひりり乃顔は似る恋かな
 今宵もあだに更行月の影
 尾上太郎が霧に沈める
 狼に木の子の番を破られて
 きほひか、れば吃る仁平次
 水 興 秋 興 何 水 何 秋

ほのゝと年は障子に明か、り
 銀の銚子に霞こめけり
 此たびは花ある園を賜はらん
 夢そらごと、いへど二度迄
 ナ
 こつばいにうみ芋のつくね引はだけ
 啼ほと、ぎす剰へ昼
 しら浪の立田をこゆる山中に
 乞食のごとき僧のまします
 何 水 秋 何 由 水 興 何

(二六才)

(二六ウ)

きのふけふ大空句ふあやしきよ
 沖に放せば鯉の鱗ふる
 心にも覚えて落し瘡病
 蚊屋にすゞしき明がたの月
 一本はことしの竹も枝になり
 小督の行ゑこゝらなるらん
 懷に温まりたる寿し文
 いとゞ荷馬の早き雪ふり

由 何 秋 水 由 秋

ミチノコ
 美江寺も江渡も冬の板づきて
 多度の社の御杖を待
 朝夕もわかで添寝の親ごゝろ
 しとくと来る雨の足音
 五六分の盛とみゆる庭の花
 友どちよりて蔵しはぶる

水 何 水 何 水 何

由 何 秋 水 由 秋 何 水 何 水 何 水

(二七オ)

(二七ウ)

○寛政元酉年九月朔日於竹生島拝殿

蝶夢

人間の来ればこそあれ秋の蠅
菊もあやしく匂ふ島山
月の中をりく雨の音もして
いま一里とて道いそぐ也
武士の矢竹になれし革羽織
巽の風の窓を吹ぬく
姿

○寛政四子八月十一日於甲賀山杉風庵

伊賀に隣る里とおもへば虫淋し
やうらがれの草の下みち
月の名のけふや最中の始にて
不老と申す酒造る也
あら布の着も馴ぬもの身にまとひ
吹けども暖き汐あひの風
夢

18 ○寛政元酉年九月朔日 於竹生島拝殿

人間の来ればこそあれ秋の蠅
菊もあやしく匂ふ島山
月の中をりく雨の音もして
いま一里とて道いそぐ也
武士の矢竹になれし革羽織
巽の風の窓を吹ぬく
蝶夢
去何
木姿
夢
何
姿

19 ○寛政四子八月十一日 於甲賀山杉風庵

伊賀に隣る里とおもへば虫淋し
やうらがれの草の下みち
月の名のけふや最中の始にて
不老と申す酒造る也
あら布の着も馴ぬもの身にまとひ
吹けども暖き汐あひの風
蝶夢
曾秋
杜音
去何
秋
夢

(二八ウ)

(二八オ)

赤^うけしつゝまねはるまじ
 まれろ乃若もめても
 恋をするばかり娘の成やせし
 雛に雨の降しほりつゝ
 鶏の首をすくめて並びけり
 いまやたしかに神移ります
 梓弓女の声をはり上て
 蜀黍高き片原の町
 何 音 夢 秋 何 音 秋 夢 音 何

西窓の障子に濡し朝の月
 彼岸の餅の腹もいつしか
 はるくと隔て来たる花の時
 霞の袖にかはす雁がね
 何 音 夢 秋 何 音 秋 夢 音 何

○同中三首 於伊賀柘植杜音亭
 隈もなく語れ語らん月の宿
 小みち乱れし草々の露
 杜音 去何
 何 音 夢 秋 何 音 秋 夢 音 何

20

○同（寛政四年八月）十三日 於伊賀柘植杜音亭

赤^ッつゝじいつくしま根に咲なだれ
 春のこゝろの夢もめでたき
 恋をするばかり娘の成やせし
 雛に雨の降しほりつゝ
 鶏の首をすくめて並びけり
 いまやたしかに神移ります
 梓弓女の声をはり上て
 蜀黍高き片原の町
 何 音 夢 秋 何 音 秋 夢 音 何

西窓の障子の濡し朝の月
 彼岸の餅の腹もいつしか
 はるくと隔て来たる花の時
 霞の袖にかはす雁がね
 何 音 夢 秋 何 音 秋 夢 音 何

隈もなく語れ語らん月の宿
 小みち乱れし草々の露
 杜音 去何
 何 音 夢 秋 何 音 秋 夢 音 何

（二九才）

（二九ウ）

李秋芳 李秋芳

秋雪河 秋雪河



曾秋

青李

蝶夢

秋

夢

何

李

夢

秋

李

何

音

夢

秋

音

何

(三〇才)

(三〇ウ)

○同十八日於伊賀上野芭蕉翁古郷塚百回忌

21 ○同(寛政四年八月)十六日 於伊賀上野芭蕉翁古郷塚百回忌

〔白紙〕

(三二才)

〔白紙〕

(三二ウ)

○寛政五丑年四月十二日 於義仲寺百回忌百歌仙興行

贈號とて仰ぐ扇かな
すししたふ正風の道 重厚
国風俗のだみたる詞かたくなに
月に落来る雁を追らん 唾玉
秋のかぜ山の峽より吹おこり 巴陵
何の黄葉も色まさりける 草斧

22 ○寛政五丑年四月十二日 於義仲寺百回忌百歌仙興行

(三二才)

贈号をはじめて仰ぐ扇かな 去何

すししたふ正風の道 重厚

国風俗のだみたる詞かたくなに 得往

月に落来る雁を追らん 唾玉

秋のかぜ山の峽より吹おこり 巴陵

何の黄葉も色まさりける 草斧

(三二ウ)

○寛政八辰年二月十三日於洛東岡崎泊庵

満中陰通夜

る水の流れをききしき日数かな
花と手向る四十九の餅
轉りの声こつそりと静りて
もたれごゝろのよき柱也
七人の老が膝くむ月の宴
薄紅るの楓ちらしつ

やぶさめに秋の風情を尽すらん
児の病を祈る甲斐あれ
雪よりも白き晒布を切さばき
眠氣覚たる夕立の跡
面かげも隔し君のおぼろ氣に
硯のうみの底つくしても
旅はいと暁ヶ遅かりき月一夜
うしろの峰をこゆる初雁

23 ○寛政八辰年二月十三日 於洛東岡崎泊庵 満中陰通夜

はるの水流れておしき日数かな

花と手向る四十九の餅

轉りの声こつそりと静りて

もたれごゝろのよき柱也

七人の老が膝くむ月の宴

薄紅るの楓ちらしつ

やぶさめに秋の風情を尽すらん

児の病を祈る甲斐あれ

雪よりも白き晒布を切さばき

眠氣覚たる夕立の跡

面かげも隔し君のおぼろ氣に

硯のうみの底つくしても

旅はいと暁ヶ遅かりき月一夜

うしろの峰をこゆる初雁

瓦全 去何 效枝 方広 全何 枝何 枝何 枝何 枝何

(二三才)

(二三ウ)

稲刈に雇はれて行女子共
祢宜耳うとくあちら向たり
藤なみの梢ばかりをうねくと
終に暮けり三月三十日

捻香

梅もこのはじめ終りや五十日
悲しさや二たび雪のこの別れ
香の煙猶きえやらず臘月
效枝

○同正月廿三日おき知川正覚庵幻阿上人一周忌通夜

丈六に重なる年の日数かな
幻阿師

其徳したふ夜は冴る月
松のかぜ笙歌の声も聞ゆらん
明州の津は見えわたりけり
下とろに花田の拾着揃へて
苗手にとればはや唄ひ出す
水

24

○同（寛政八年）十二月廿三日

於愛知川正覚庵幻阿上人一周忌通夜

稲刈に雇はれて行女子共

祢宜耳うとくあちら向たり

藤なみの梢ばかりをうねくと

終に暮けり三月三十日

捻香

梅もこのはじめ終りや五十日

悲しさや二たび雪のこの別れ

香の煙猶きえやらず臘月

何 広 枝 何 方 広 去 何 效 枝

（三四才）

丈六に重なる年の日数かな

幻阿師

其徳したふ夜は冴る月

松のかぜ笙歌の声も聞ゆらん

明州の津は見えわたりけり

下とろに花田の拾着揃へて

苗手にとればはや唄ひ出す

何 去 何 里 秋 芦 水 水

（三四ウ）

細眉のよい子見付し竹格子
衣がへして寝れば鐘鳴る
兼て祈る星も相逢ふこの頃に
二日月みるはづかしの森
空蟬となり果るまでふためきて
何おもひ出に惜む白髪ぞ
なみくと寒の水とて貯ひ置
初穂上れば酒のます寺
秋 由 水 何 水 秋 何 水

埃たつ世界を低く見おろして
楠多門兵衛伺公す
末広の折目流る、涙川
兎かくいふまに朝日輝く
花見れば花のこしかた忍はる、
心あまりて雀ち、く
秋 由 水 何 水 秋 何 水

○同廿四日旅多賀雨亭追福

25

○同（寛政八年十二月）廿四日 於多賀喜雨亭追福

（二六ウ）

何 秋 由 何 水 何 秋 由 水 何 水 秋 何 水

（二六オ）

大いふききり年（の）りねえ
新百千（り）呀（り）る月
潮（り）じ延（り）る波（り）るり
まきりききり乃（り）煙（り）き
ききり（の）はき（り）きき（り）は
きき（り）きき（り）乃（り）きき（り）
きき（り）きき（り）きき（り）きき（り）
きき（り）きき（り）きき（り）きき（り）

四とやうにも言ふ程で
 着のまゝ鳴きと云へて舟
 赤く高き處にありて
 終久も聲と交わりて
 油残さうと云ふ程の
 ひびき——さうに月のおど
 とす乃言休や 涼地の里
 女もさうと解しうさうと

幻阿師

塘里

月川

如毛

里

川

去何

皿をやるにも言葉祝ふて

夢のまに鳴戸をこえし走舟

赤く鳥居の立直りけり

徳大寺殿を誉める口ぐに

油をはかる夕ぐれの露

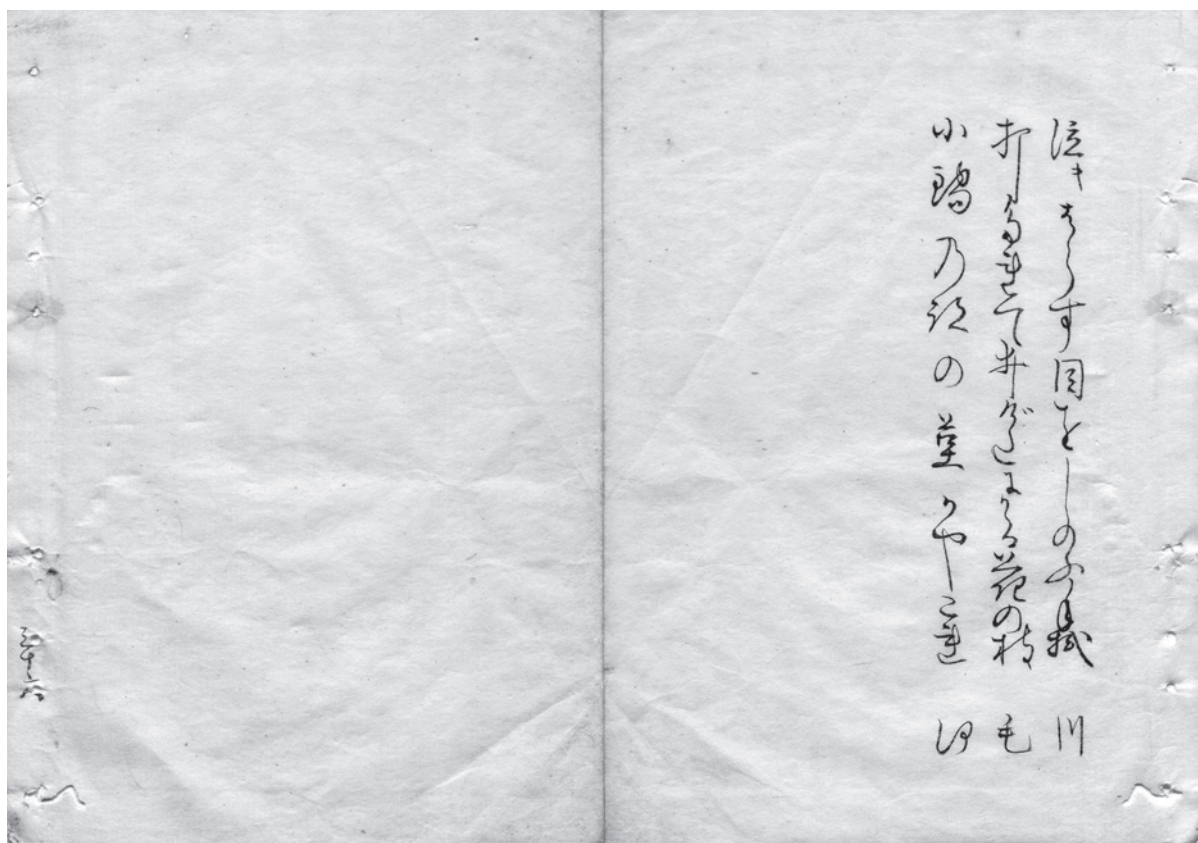
ひゝわれし団子に月のぴかつきて

菊の節供や深草の里

女子らが帯を解たりとかれたり

(三七才)

(三七ウ)



泣きはらす目をしのぶ手拭
打たれて井げたにかゝる花の枝
小鍋の跡の堇かやこれ

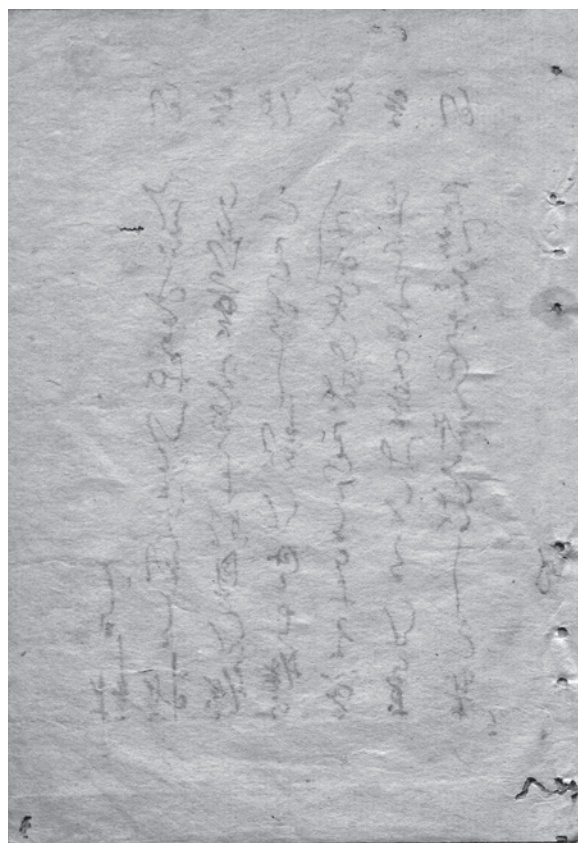
何 毛 川

(三八才)

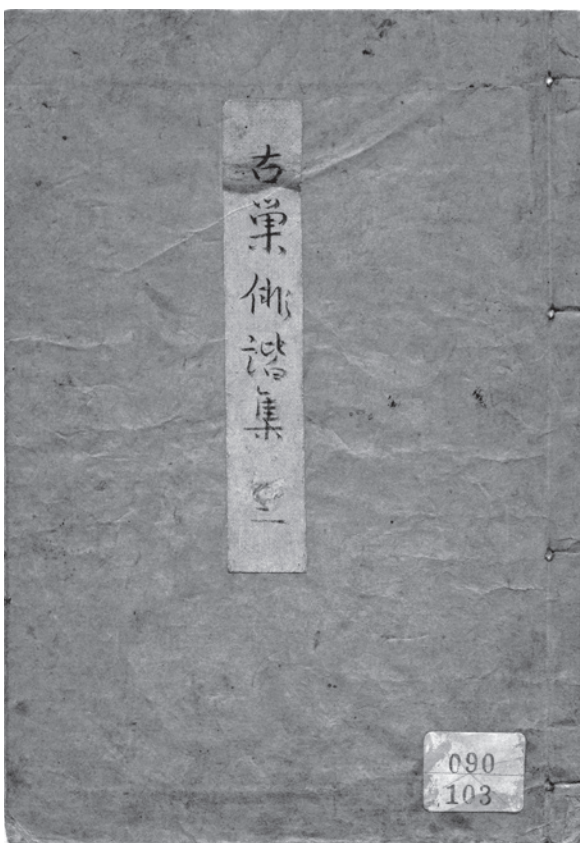
(三八ウ)



(裏表紙)

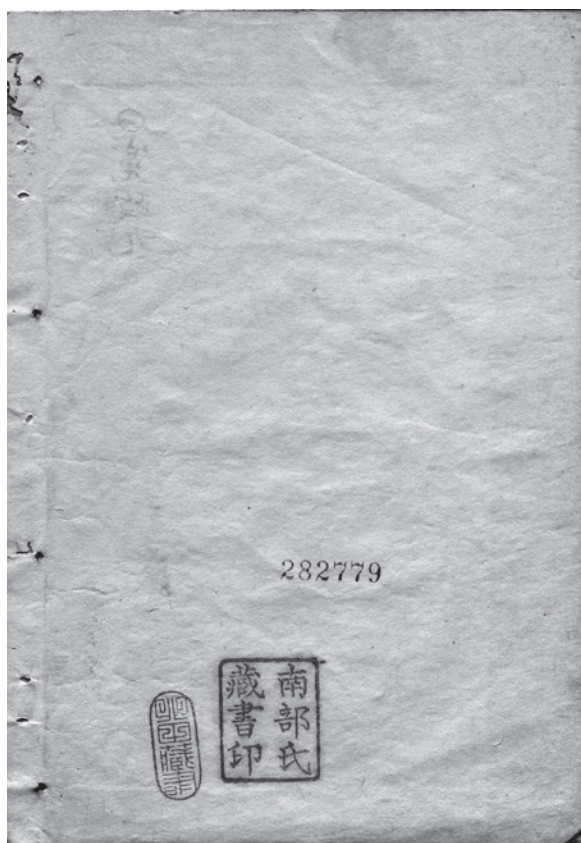


(裏表紙見返し)



古巢俳諧集 二

(二卷・表紙)



(二卷・表紙見返し)

何

何

(三九ウ)

何處何處何處

邯山

江山何處

何 広 何 広 何 広

何 山 瓜 泥 云 何 蚊 山

(四〇ウ)

豊のうへに蝨羽を打
 水かさの島田金谷は秋しらず
 わすれてしまふけふの精進
 三人の若いもの共角ミ入て
 茅のわをそつと潜る初恋
 しらぬふりして行過る後口かけ
 千疋づれの牛に出合える
 何 瓜 山 何 瓜 山 何 瓜 山 何 瓜 山

月かけて明石へはこぶ米俵
 相撲に勝し顔のにくさ気
 露霜や母の寝所の障子はる
 姿をかくす蜘蛛のふるまひ
 青柳の青きが中に花咲て
 能登の七尾も弥生也けり
 〇大ひえや四月八日の花の雪
 あらはるゝ四明が嶽や夏の初
 何 瓜 山 何 瓜 山 何 瓜 山 何 瓜 山

豊のうへに蝨羽を打
 水かさの島田金谷は秋しらず
 わすれてしまふけふの精進
 三人の若いもの共角ミ入て
 茅のわをそつと潜る初恋
 しらぬふりして行過る後口かけ
 千疋づれの牛に出合える
 月かけて明石へはこぶ米俵
 相撲に勝し顔のにくさ気
 露霜や母の寝所の障子はる
 姿をかくす蜘蛛のふるまひ
 青柳の青きが中に花咲て
 能登の七尾も弥生也けり
 〇大ひえや四月八日の花の雪
 あらはるゝ四明が嶽や夏の初

何 瓜 山 何 瓜 山 何 瓜 山 何 瓜 山 何 瓜 山 何 瓜 山 何 瓜 山

(四一ウ)

(四一オ)

○同年九月九日 於多賀權室

菊に月やねさへあらばすまるべし
去何
菜萸茶を給ふ一鍋の友
月川
秋水のみなざる外の音なくて
如毛
烏はこゝの主がほなり
塘里
冠のわれをつくる大夫殿
川

曉ちかく雪降にけり
何
寺々の鐘は師走もよそに撞
里
大津の人の石荷ひ行
毛
すこしづゝ酒をたべればおもしろく
何
二すじの矢に雲は晴たり
川
脱捨し萌黄の衣ぬしや誰
毛
あやめの前が詞ゆかしき
里

28 ○同（寛政九）年九月九日 於多賀權室

菊に月やねさへあらばすまるべし
去何
菜萸茶を給ふ一鍋の友
月川
秋水のみなざる外の音なくて
如毛
塘里
冠のわれをつくる大夫殿
川

曉ちかく雪降にけり
何
寺々の鐘は師走もよそに撞
里
大津の人の石荷ひ行
毛
すこしづゝ酒をたべればおもしろく
何
二すじの矢に雲は晴たり
川
脱捨し萌黄の衣ぬしや誰
毛
あやめの前が詞ゆかしき
里

（四二才）

（四二ウ）

水門のあたりはもはや蚊の鳴て
 主様さへ落花しにけり
 麗や我は阿房と指さ、れ
 五つは見たよ六ツの玉川
 暗かりし月明かりし月哀
 布子で寒きかけ抜の道
 丈六の後光にかゝる蔦かづら^ナ
 毛川何毛里何川

訴ごとのやすくとすみ
 結織の手をつかまへる舟のへり
 潮来訛りの涙ぐみつ、
 西さまが本とはいへど東さま
 曲突のあたりも光かゞやく
 夕まぐれ日ましの鯛を捨にやり
 吉次一人は算盤をする
 毛川何毛里何川

何 毛 川 何 毛 川 里 毛 川 何 毛 里 何 川

(四三ウ)

(四三オ)

初秋に易く生るゝ男孫
 月はずんずとのぼる杉むら
 放たれし鳥ら寝もせでもの語る
 肘の田虫なほるそう也
 慰にのんこ作れば笑はれて
 堂のうしろの雨は涼しき
 ちよこくと塩かりに來た一走り
 川 毛 里 川 何 毛 川

女もじならおれはしらぬぞ
 大和には花の名所多ければ
 宵の膾や朝の青あへ
 毛 里 何

○各詠

しら菊や御供はやはり三杵つき
 月のきく心にくきは暗い所
 すい垣や菊に田舎はなかりける
 寺へならおらばやおらん菊の花
 塘 如 月 去
 毛 川 何

初秋に易く生るゝ男孫

月はずんずとのぼる杉むら

放たれし鳥ら寝もせでもの語る

肘の田虫なほるそう也

慰にのんこ作れば笑はれて

堂のうしろの雨は涼しき

ちよこくと塩かりに來た一走り

女もじならおれはしらぬぞ

大和には花の名所多ければ

宵の膾や朝の青あへ

○各詠

しら菊や御供はやはり三杵つき

月のきく心にくきは暗い所

すい垣や菊に田舎はなかりける

寺へならおらばやおらん菊の花

(四四才)

(四四ウ)

○同年十一月九日

小半時静也けり冬の雨
火燵より鼻をつき合す汗
尊が筑波山より罷出て
繫もならぬ春のわか駒
朧月赤いものほど気色だち

舟はいくらと事もなく着
一人ぬけ二人ぬけゝる屋敷衆
触が廻りて無尽つぶるゝ
ぐつぐといまだに魚はにえてゐる
青葉に成ぬ峰は夜のまに
望の日は西行の日で猶すゞし
四国の人を心うれしき

29 ○同（寛政九）年十一月九日

小半時静也けり冬の雨
火燵に鼻をつき合す汗
尊が筑波山より罷出て
繫もならぬ春のわか駒
朧月赤いものほど気色だち

舟はいくらと事もなく着
一人ぬけ二人ぬけゝる屋敷衆
触が廻りて無尽つぶるゝ
ぐつぐといまだに魚はにえてゐる
青葉に成ぬ峰は夜のまに
望の日は西行の日で猶すゞし
四国の人を心うれしき

（四五才）

（四五ウ）

鄙うたをきけば何となき恋ぞよき
 くねるも高が露女郎花
 月影にいとめてつゝる米袋
 ひがん団子で得意ついたり
 虻蜂のわんわといふは裏の花
 三味ひく事もしらで永き日
 ナ
 囲はれて冴返たる身の程や

鷺脚——何うう溝せゝる也
 見わたせばはんの木ばかり立並び
 壬生の地藏の冬のこの頃
 挑灯に藍を染たる今流行
 姫はなくく手をひかれ行
 越後路や山ほとゝぎすく
 八重山吹も田の草に刈

何、得、何、得、何、得、何、得、何、得

(四六才)

(四六ウ)

何、何、何、何、

何

、 亨 、 亨

、 去何 、 此得 得 何 、 得 、 何 、 得 何 、

(四七ウ)

○寛政十戊午年二月十五日 於古巢園

松風もなしよ田螺の蓋明て

加金

鹿古

それが匂ひに曇る菜の花

何

裸子や春の天児つくるらん

、

舟へ寝に行役も有けり

古

樞さす音きり／＼と月の影

、

樞なんど焼く匂ひ成べし

何

露霜の世をまし銀に牛かへて

古

わが本名は人はしらじな

何

小日向の町は遊女にうときまで

古

書て引さく忍ぶもじ摺

何

村雨に慈鎮の像の置所

古

月に手折し卯花ぞこれ

何

30
○寛政十戊午年二月十五日 於古巢園

松風もなしよ田螺の蓋明て

加金 鹿古

それが匂ひに曇る菜の花

去何

裸子や春の天児つくるらん

、

舟へ寝に行役も有けり

古

樞さす音きり／＼と月の影

、

樞なんど焼く匂ひ成べし

何

露霜の世をまし銀に牛かへて

古

わが本名は人はしらじな

何

小日向の町は遊女にうときまで

古

書て引さく忍ぶもじ摺

何

村雨に慈鎮の像の置所

古

月に手折し卯花ぞこれ

何

(四八才)

(四八ウ)

こゝろゝ水腥き 鮠の腸
 虱薬と二人してわけ
 神垣に膝まづいても泣ばかり
 子日寂しき 応仁の頃
 今にては左近の花の色まして
 小石小砂の 乃中れ驚
 ナ なき人の衣を地蔵にきせ申

古 何 古 何 古 何 古 何

三十日にちかき 闇の雪降り
 風呂吹のあげ句は寒きすまひ哉
 幾らの弓のたふれたるまゝ
 鞍馬山昼寝は誰がゆるしけん
 俗が額をせゝる 青蠅
 何事ぞ小言いひもてなく鳥
 おもひは波も焦す 中島

古 何 古 何 古 何 古 何

(四九才)

(四九ウ)

名なし草やればくれたる根なし草
 皆ぞはつきて七夕の月
 流行におくれし奈良の秋団
 焙にかけん露の水から
 山臥の留守して瀧を吹ばかり
 初て見たる紫のくも
 其雲は浅黄桜の花の末

何 古 何 古 何 古 何 古 何 古

宿引にくむ春の夕ぐれ
 馬の下くぐりて虻にとがめられ
 取落しけり蛤の餅

何 古 何 古 何 古

○
 はる雨は二寸あやめの軒端哉
 しとやかに花の母とて降にけり
 望別
 いそがしや花のみやこへのぼる人

何 古 何 古 何 古 何 古

(五〇才)

(五〇ウ)

○同年七月十五日 お知善院

本尊を親とたのみて盆勤め
いとよく結ぶ寺の蓮の実
海までも盛あがりたる月影に
いざ一挙矢を放ちみん
下されし金の短冊ほのめかし
月川 此得 去何 邦雄 吳天

鶏啼けば昼さがる也
茶をたきて往来たすくる此野らや
慈悲一ぺんの御代に成たり
横ぶりもせず静なる雨の脚
琴にむかひておもひ暮しつ
大原やざこ寝と聞もうらやまし
紫だちて暁る山のは
川 得 天 雄 何 川 得

31 ○同（寛政十）年七月十五日 於知善院

本尊を親とたのみて盆勤め
いとよく結ぶ寺の蓮の実
海までも盛あがりたる月影に
いざ一挙矢を放ちみん
下されし金の短冊ほのめかし
月川 此得 去何 邦雄 吳天

鶏啼けば昼さがる也
茶をたきて往来たすくる此野らや
慈悲一ぺんの御代に成たり
横ぶりもせず静なる雨の脚
琴にむかひておもひ暮しつ
大原やざこ寝と聞もうらやまし
紫だちて暁る山のは
川 得 天 雄 何 川 得

（五一才）

（五一ウ）

佐多ハまに力毛の弱より
田を耕せば春の月毛の駒にめし
花垣の花とてもてる懐に
きいと鳴らして明る閑の戸
降続く空の日の数ふる狸
豆焼キすなる節分の宵
うつくと七福神ともの語リ

何 雄 何 天 川 何

網乃獲もはここの魚
わが妻の機嫌とるのも母の為
蚊屋つり草やとこなつの花
やすくと御経わたす砂川原
左リが刻む龍の睡する
蓬萊の銀土器の光さし
小松うへんと立出にけり

何 雄 何 天 川 何

佐殿は春の月毛の駒にめし

田を耕せば春の月毛の駒にけり

花垣の花とてもてる懐に

きいと鳴らして明る閑の戸

降続く空の日の数ふる狸

豆焼キすなる節分の宵

うつくと七福神ともの語リ

網の獲ものはこのしろの魚

わが妻の機嫌とるのも母の為

蚊屋つり草やとこなつの花

やすくと御経わたす砂川原

左リが刻む龍の睡する

蓬萊の銀土器の光さし

小松うへんと立出にけり

何 雄 得 何 天 川 何 雄 得

(五二才)

(五二ウ)

何の香もてや蝶の袖に来る
 実相の月ひづんでもなし
 ぼち／＼と五器を離る、椎の音
 鹿島のわたり絶し秋風
 多賀より使来りて月川の
 いきにけるまゝ止
 天 雄 川 得

○同年 八月十八日 於蝸牛庵

いざ共に刈てうたはん月の夜田
 一つにすゝる小菜の雑炊
 秋の蠅追もせね共すくなふて
 障子に白き風わたる也
 御宝船は沖中川を漕やらん
 去何 里秋 月川 如毛 塘里

32 ○同（寛政十）年八月十八日 於蝸牛庵

何の香の有てや蝶の袖に来る
 実相の月ひづんでもなし
 ぼち／＼と五器を離る、椎の音
 鹿島のわたり絶し秋風
 多賀より使来りて月川の
 いきにけるまゝ止
 天 雄 川 得

いざ共に刈てうたはん月の夜田
 一つにすゝる小菜の雑炊
 秋の蠅追もせね共すくなふて
 障子に白き風わたる也
 御宝船は沖中川を漕やらん
 去何 里秋 月川 如毛 塘里

（五三ウ）

（五三ウ）

尾上杉下郭——ろろく
 世乃例とひ續くる志のうゝ
 髪おろすべく名を囃ひけり
 大ひらな雪降つもる豆腐簀
 春の隣乃松の下町——
 吹しきる笛の音色にあこがれて
 ケりやの瘦け汁も参らず
 川 秋 何 温 中 此 得 師 由 芦 水

うちまゝ金と持る虫の来し
 まくぞかゝる葉柳の月
 乗つけにくり付たる桑の弓
 諏訪の社にけふは参らん
 わが妻に心の花はあかさされず
 おもひ寝にねる春の夕ぐれ
 由 得 中 毛 里 水

(五四才)

(五四ウ)

○同年九月廿三日 於勝軍山

夜田刈や我は月みる奢もの
酒温るゝま知の露
秋の蝶はねの白きながらへて
車さばくる人もちかづき
あらがねの土の細工やさまぐに

女松男松をうへ並べたり
初春の鶯衣うち重ね
鮑あぶれば押かけてみへ
ざぶくと四つ五器洗ふ浪の花
寿永の後の国の静さ
先づりに得意の仕事して廻り
ほや／＼いふて娘わらはす

33 ○同（寛政十）年九月廿三日 於勝軍山

夜田刈や我は月みる奢もの 此得

酒温るたき草の露 去何

秋の蝶はねの白きながらへて 、

車さばくる人もちかづき 得

あらがねの土の細工やさまぐに 、

女松男松をうへ並べたり 何

初春の鶯衣うち重ね 吳天

鮑あぶれば押かけてみへ 邦雄

ざぶくと四つ五器洗ふ浪の花 何

寿永の後の国の静さ 得

先づりに得意の仕事して廻り 何

ほや／＼いふて娘わらはす 雄

（五五才）

（五五ウ）

二つ星こよひは誰もうはの空
 いつしか月は入し萩がね
 横笛の音もや、寒き折からに
 坂東駒のまづ嘶ぶ也
 小桜の鎧に雪の花散て
 余所へやる子の髪置もすみ
 ナ
 女房の夜なべいつまで果しなき
 何 雄 何 何 何 何 何

人をつれなく蚤にせゝらせ
 能因の塚おがむ日や翌ならん
 箕面の滝に衣打たせる
 何 何 何 何 何 何 何
 ○ 雄 呉の二子公事出来たれば止
 つかれて果はかゝしの行急哉
 たのもしや西に窓ある庵の月
 土器の酒のむ朝の寒さ哉
 稲かりに尻くらべとや飛ぶ鶉
 何 何 何 何 何 何 何

二つ星こよひは誰もうはの空
 いつしか月は入し萩がね
 横笛の音もや、寒き折からに
 坂東駒のまづ嘶ぶ也
 小桜の鎧に雪の花散て
 余所へやる子の髪置もすみ
 ナ
 女房の夜なべいつまで果しなき
 何 得 何 何 何 何 何

(五六才)

人をつれなく蚤にせゝらせ
 能因の塚おがむ日や翌ならん
 箕面の滝に衣打たせる
 何 得 何 何 何 何 何
 ○ 雄 呉の二子公事出来たれば止
 つかはれて果はかゝしの行急哉
 たのもしや西に窓ある庵の月
 土器の酒のむ朝の寒さ哉
 稲かりに尻くらべとや飛ぶ鶉
 何 去 何 何 何 何 何

(五六ウ)

○同年十月十日 室生山知善院

豊臣 朝覚大禪定門公會式

報恩のこれも露なれ土大根

月川

室乃山の冬も暖

去何

簾の声いかなる人の居るやらん

此得

水はくるくまはりてぞ行

紫虹

汐風に月は出たりほんのりと

擔芝

節供の菊ははや匂ふ也

執筆

錦木を立ると心や、寒き

邦お

うばが在所へ文書てやる

呉天

鶏もばら／＼雨の降出して

其環

四神の簾を配り初る

川

噓に烏帽子の紐のちぎれたり

何

たはごとやらの黒烟たち

得

34 ○同(寛政十)年十月十四日 室生山知善院

豊臣 朝覚大禪定門公會式に

報恩のこれも露なれ土大根

月川

室の山の冬の暖

去何

簾の声いかなる人の居るやらん

此得

水はくるくまはりてぞ行

紫虹

汐風に月は出たりほんのりと

擔芝

節供の菊のはや匂ふ也

執筆

錦木を立ると心や、寒き

邦お

うばが在所へ文書てやる

呉天

鶏もばら／＼雨の降出して

其環

四神の簾を配り初る

川

噓に烏帽子の紐のちぎれたり

何

たはごとやらの黒烟たち

得

(五七ウ)

(五七オ)

天 かな 月を 囀る 罌粟を 下ろへ 團子寺
 何 川 何 牛 此 花の 口を 切
 何 川 何 代 ぐ 稀の あり ます なる
 何 川 何 世 人 短 刀 子 寺 の内 義を 誉そ やす

天 かな 月を 囀る 罌粟を 下ろへ 團子寺
 何 川 何 牛 此 花の 口を 切
 何 川 何 代 ぐ 稀の あり ます なる
 何 川 何 世 人 短 刀 子 寺 の内 義を 誉そ やす

咲かゝる罌粟を一寸間へ囀はる、

紹鷄殿を月にむかへて

秋の蚊のいまだつぶやく小栗栖野

いづらや竹の春の夕ぐれ

南べらはみる／＼花の口を切

代かく脚の水にまけゝる

ナ
ひがん団子寺の内義を誉そやす

無尽もくろむ夜のからかひ

隣から灰毛の猫をかりて来て

蚕はまゆに身を包みけり

五月雨のよき頃ほひに晴あがり

沼津どまりの宿殿をやる

俯て夫の歌を忍ぶなる

世は短刀のつかのまぞかし

天 お 川 何 得 川 何

お 天 何 得 天 川 何

(五八才)

(五八ウ)

水虫の野馬虫に成てかしましき
芋運上のやうくとすむ
盗人に見限られたる秋の月
唐の男の出ては戻らぬ
板敷に紙屑籠をうち明て
折も有うに大年の雪
えのころのはや喰物にさがし立

得 川 何 得 お 何 得 何 川

こつりくとつくはつくばね
下部にも小袖きる代の花の春
五形花のにしき平一面

川 天 筆

○
はつ花が咲はよし野を口へ出て
世は静謐の春のもの音
酒のみをすぐりくゝて召れける
唐の李白が五百年忌に

何 何

水虫の野馬虫に成てかしましき

芋運上のやうくとすむ

盗人に見限られたる秋の月

唐の男の出ては戻らぬ

板敷に紙屑籠をうち明て

折も有うに大年の雪

えのころのはや喰物にさがし立

こつりくとつくはつくばね

下部にも小袖きる代の花の春

五形花のにしき平一面

○
はつ花が咲はよし野を口へ出て

世は静謐の春のもの音

酒のみをすぐりくゝて召れける

唐の李白が五百年忌に

得

川

何

得

お

何

得

川

天

筆

去何

去何

(五九才)

(五九ウ)

寛政十二庚申六月お古巢堂

加金

何

夕がほの宿を食る月夜かな

わけて啜ふ露のきり麦

何

みさご啼薪つみ舟の往かひに

至

あしたをたのむ声ぞおかしき

何

老しらぬ春の衣の出来揚り

至

草履おろして草摘にゆく

何

能因の庵に年礼いひがてら

、

世にめづらしき笛聞にけり

至

東へと車を飛ばす軍共

何

ゆかしき顔にいたく雪ふる

至

暉をそくふてやらん忍びつ、

何

筑摩の里に鍋みがくかな

至

35

○寛政十二庚申六月 於古巢堂

夕がほの宿を食る月夜かな

わけて啜ふ露のきり麦

加金
北至
去何

みさご啼薪つみ舟の往かひに

至

あしたをたのむ声ぞおかしき

何

老しらぬ春の衣の出来揚り

至

草履おろして草摘にゆく

何

能因の庵に年礼いひがてら

、

世にめづらしき笛聞にけり

至

東へと車を飛ばす軍共

何

ゆかしき顔にいたく雪ふる

至

暉をそくふてやらん忍びつ、

何

筑摩の里に鍋みがくかな

至

(六〇才)

(六〇ウ)

ちてまハ加れタ乃きけあ
 うらなれハありふん
 鳥帽子のひもにぢめる萩の花
 花を愛して二人扶持とる
 酒のみていで踏はやる川蜷
 産田の城の如月の霜
 哀いかにけふの夕がほ我一人
 去何

〇寛政十二九月尽 於俊藏院夜明

かりろのこの淋しさや秋の暮
 山とおもひ疎うづ月
 鴻鶴の小鴨の中に鳴つれて
 国司の徳をよろこびのこ糸
 盛上る土器の酒こぼすなよ
 得何

36

〇寛政十二(年) 九月尽 於俊藏院夜明

〇送別

哀いかにけふの夕がほ我一人

去何

ゆで豆は月の夕のさげもの
 馬が戻ればきりくす鳴
 鳥帽子のひもにぢめる萩の花
 花を愛して二人扶持とる
 酒のみていで踏はやる川蜷
 鶴田の城の如月の霜
 何 至 何 至 何

おもしろのこの淋しさや秋の暮
 山を相手に礫うつ月
 鴻鶴の小鴨の中に鳴つれて
 国司の徳をよろこびのこ糸
 盛上る土器の酒こぼすなよ
 得何

(六一ウ)

(六一オ)

水の音あり松の音あり
 御僧は都に在しもの囃ひ
 しぐれを語る時は来にけり
 菊薄かれながら畳う紙
 おもひ出なれや垣くゞりしは
 今やうは声を作りてはふらかし
 何うき舟のはしりかねそも
 何 里 得 何 里 何 里 何 里 何 里

風波は続く天氣の宵の月
 あばる、駒のふり髪露
 やう／＼にあふひでさます粟の飯
 一人の孫よ士になれ
 嫁葉土筆に扇貝そへ
 ナ 丸腰で酢を買に行ぬくと雨
 何 里 得 何 里 何 里 何 里 何 里 何 里

擔芝

朱山

(六二才)

(六二ウ)

うきうき人ふねてきりあ
 ちがふと女房衆乃きやうる
 ほうほうふ 唐やわん 顔
 けやふきまの埃乃きりく
 振むくくく 望陽のむ
 情なくかりの宿りを惜まれし
 これや庄司が跡の山口
 里 何 山 得 何 里

十反の池を掘きる月のため
 礎折く望まれてうつ
 咲ものは続々に夢の花ばかり
 よせて潮の軒をはしれる
 遺愛寺の鐘の響にしのめて
 誰を向ひにゆく鳥やら
 喰あけし米の俵の数限り
 里 何 得 何 得 何 里

サメ

主馬なる人はねてばかり居る
なぶらんと女房衆のさ、やかな

涙ぐみたる唐犬の顔

此ほどの麦の埃のはつくして

振むくかたに紫陽の花

情なくかりの宿りを惜まれし

これや庄司が跡の山口

十反の池を掘きる月のため

礎折く望まれてうつ

咲ものは続々に夢の花ばかり

よせて潮の軒をはしれる

遺愛寺の鐘の響にしのめて

誰を向ひにゆく鳥やら

喰あけし米の俵の数限り

(六三才)

(六三ウ)

ちやけーハかりーるる所
 正月のまゝ花のまゝて
 りれちくれハむら塩鯛
 雪のけりけりてまゝに
 うづみ火や更て覚ゆる足の脉
 冬の雨夜のうちはふらざりき
 寒菊や甘露寺殿の御簾の内

何 里 得
 此 得
 朱 山
 塘 里

夕立に新しうなる裸山
 水田の月にうたふ草殿
 鯛のいを砂にまぶしてとらまへる
 親なしの子がはらくとなく
 松杉のみの寂寞のうち
 花のかや士が来て戸を叩く
 重ねたる古き給の秋ふりて
 数珠もくられず神主ぞうき

去 何
 何
 、
 、
 、

在郷町はおかしかりけり
 正月の末から花の色みへて
 日の長ければむしる塩鯛

何 里 得

雪の伊吹何所から見ても爰に有
 うづみ火や更て覚ゆる足の脉
 冬の雨夜のうちはふらざりき
 寒菊や甘露寺殿の御簾の内

去 何
 此 得
 朱 山
 塘 里

夕立に新しうなる裸山
 水田の月にうたふ草殿
 鯛のいを砂にまぶしてとらまへる
 親なしの子がはらくとなく
 松杉のみの寂寞のうち
 花のかや士が来て戸を叩く
 重ねたる古き給の秋ふりて
 数珠もくられず神主ぞうき

去 何
 何
 、
 、
 、

(六四才)

(六四ウ)

○享和元年辛酉十月卅日 於喜雨亭

風れ吹や綿木れいつまでも
霜に活たる蝶も有もの
畚の子に朝日の影のつとさして
月の団子の米を洗はん
茯苓のほのぐ匂ふ青俵

里秋

去何

引牛

師由

塘里

山れおくまで豊の秋也
小盲の琵琶一張を重たげに
まいる所は鳥羽の恋づか
世を捨て三十の春の美しき
ぬれく摘る雨の花籠
淡雪の歌御意に入る二首ながら
夢かとおもふ程に夜をねぬ

何

秋

由

世

何

里

秋

37 ○ 享和元年辛酉十月卅日 於喜雨亭

風の吹や綿木のいつまでも

霜に活たる蝶も有もの

畚の子に朝日の影のつとさして

月の団子の米を洗はん

茯苓のほのぐ匂ふ青俵

里秋

去何

引牛

師由

塘里

山のおくまで豊の秋也

小盲の琵琶一張を重たげに

まいる所は鳥羽の恋づか

世を捨て三十の春の美しき

ぬれく摘る雨の花籠

淡雪の歌御意に入る二首ながら

夢かとおもふ程に夜をねぬ

何

秋

牛

由

何

里

秋

(六五才)

(六五ウ)

○同年十一月廿三日幻阿上人七回忌於古巢堂

窓よりくさるやまの雪の影

去何

むかしを探る江北の梅

塘里

鳥がなく山のそへも夜のもて

此得

蟹の飯たくけぶり成べし

尼知了

法橋が月の匂ひを書直す

里

豊のうへにみゆるしら雪

何

ひよろくと吹れて来たる秋の蝶

、

晴名は杉のよき所也

得

髪薙て身はさつぱりと恨なき

里

仏に上る鏡拭ふて

何

不曉から触ゆく声は初茄子

得

風炉の茶の湯のせわしかりつる

里

何

何

38 ○同(享和元)年十一月廿三日幻阿上人七回忌於古巢堂

窓にはる反故やみなこれ雪の影

去何

むかしを探る江北の梅

塘里

鳥がなく山のそへも夜の明て

此得

蟹の飯たくけぶり成べし

尼知了

法橋が月の匂ひを書直す

里

豊のうへにみゆるしら雪

何

ひよろくと吹れて来たる秋の蝶

、

晴名は杉のよき所也

得

髪薙て身はさつぱりと恨なき

里

仏に上る鏡拭ふて

何

不曉から触ゆく声は初茄子

得

風炉の茶の湯のせわしかりつる

里

(六七ウ)

(六七オ)

静さは釣簾の戸に入る月の色
拾ふてちちのまふふふ、
ふふふ 碓の槌に繋がれて
一人は 武士の跡とりになれ
あ乃山々日けのよさに花開く
はるの恵みは限しられず

了 何 、 里 得 何

○享和二壬戌年三月 於膳所若林氏

はつ蝶や人にも花を尋がほ
目もまほしきささらぎの空
旅衣はるは都に日を重ね
袋のきれの調ひにけり
三五夜のたゞ丸かれとおもふ也

去 何 瓜 土 何 篤
何 泥 篤 泥 篤

39

○享和二壬戌年三月

於膳所若林氏

静さは釣簾の戸に入る月の色
拾ふてちらす青葉紅葉々
馬の子が碓の槌に繋がれて
一人は武士の跡とりになれ
あの山は日うけのよさに花開く
はるの恵みは限しられず

了 何 、 里 得 何

はつ蝶や人にも花を尋がほ
目もまほしきささらぎの空
旅衣はるは都に日を重ね
袋のきれの調ひにけり
三五夜のたゞ丸かれとおもふ也

去 何 瓜 土 何 篤
何 泥 篤 泥 篤

(六八才)

(六八ウ)

唐黍かれハ窓明うなり
 時^ウ二つこゆる度々なく鶉
 横筋かひに乗物をおく
 小瘡の跡とかやいふ黒赤く
 昼はかくる、枚方の君
 針さしの中に入たる錢五文
 二十四日は地藏さま也
 何 東走 菊二 何

鬼灯の残らず売れる盆の月
 茄子に穴を明ケし虫の音
 北風の続いて通す肌寒み
 印南郡の伯母の煩ひ
 祢宜殿に祈禱を頼む森の梅
 柳の枝を操る手水場
 蛙子^ナのもの嬉しげに尾を振て
 何 二 何 二 何 二 何

(六九才)

(六九ウ)

隣在所の斎によはるゝ
 若く菖を袂へ入しおかしさよ
 若いこゝろに身だしなみする
 情なく一番鶏の啼出して
 すぐれて寒きこの頃の雨
 よい衆とて汐汲のさへ見たいとは
 魚の油のほふ灯
 温中

拵て二階へ上る升落し
 ぬれ手拭の顔にかゝりて
 温泉の山は月見に来てもよい所
 桜紅葉のちるやちらく
 長持をさし荷ひたる初穂殿
 垣の内から樽をさし出す
 其事と奥州詞うなづきて
 邦お

隣在所の斎によはるゝ

若く菖を袂へ入しおかしさよ

若いこゝろに身だしなみする

情なく一番鶏の啼出して

すぐれて寒きこの頃の雨

よい衆とて汐汲のさへ見たいとは

魚の油のほふ灯

拵て二階へ上る升落し

ぬれ手拭の顔にかゝりて

温泉の山は月見に来てもよい所

桜紅葉のちるやちらく

長持をさし荷ひたる初穂殿

垣の内から樽をさし出す

其事と奥州詞うなづきて

二

か

二

か

里秋

芦水

温中

塘里

か

塘

此得

其環

呉天

邦お

(七〇オ)

(七〇ウ)

宵まどろひの春は来にけり
土器の酒のこぼる、寺の花
何かにくふて松むしり鳥

○
背の高き仏になると自由自在
妻手は桜の一目千本
玉みそぬりし鱸マスの月
膝がしら寒げに蝦夷等かしこまり

○同年三月廿二日彦根如雲屋
禪直上座七回忌

鏡鑄なす跡とふ木地の炉縁哉
李の花に俳の月
わらの筆春の雀の窺て
朗詠集に水のかゝりし
膳立は誰かさし図におもしろき

40

○同(享和二年三月廿二日彦根如雲屋

禪直上座七回忌

鏡鑄なす跡とふ木地の炉縁哉
李の花に俳の月
わらの筆春の雀の窺て
朗詠集に水のかゝりし
膳立は誰かさし図におもしろき

去何
飛川
塘里
何
川

(七一ウ)

(七一オ)

ねたければ寝る舟のつき合
 根おろしの風折えほし驚かし
 御祓乃を五位鳴わたる
 ある人の誓ひにうへしよし竹や
 ひなづる姫のぬき足をして
 待宵の夜は嘉例なるお味嘈つき
 翌はせわしき綿の初札
 川 里 川 里 川 里

しかぐと干して取おく鴨脚の葉
 なつけ過たる寺の鶏
 冬至から毎日ふれど小糠雪
 小野の便りを心待する
 兼栽と花みし時は辛くふて
 松のみどりを風呂敷に書
 川 里 川 里 川 里

里 川 里 川 里 川 里

(七二才)

(七二ウ)

○享和三癸亥年正月廿五日 お喜雨亭

夜の雨嬉し余寒の案じなし
寝言いふとも春の囁り
児ざくら李の花に重なりて
井の水甘く村中に汲
名月の光は別とおもはる

ぬぐふて廻す伏笹の露
上簾戸についてあがりし青瓢
あみだが峰へ逃る飼鳥
坂東の人も涙の袖はあり
何んのかのとて草鞋はきかね
生笹を鼎せましとおしくべる
雪は天までつもる曙

41 ○ 享和三癸亥年正月廿五日 於喜雨亭

夜の雨嬉し余寒の案じなし
寝言いふとも春の囁り
児ざくら李の花に重なりて
井の水甘く村中に汲
名月の光は別とおもはる、

塘里 去何 如毛 里 か

ぬぐふて廻す伏笹の露
上簾戸についてあがりし青瓢
あみだが峰へ逃る飼鳥
坂東の人も涙の袖はあり
何んのかのとて草鞋はきかね
生笹を鼎せましとおしくべる
雪は天までつもる曙

毛 、 か 里 か 里 毛

(七三才)

(七三ウ)

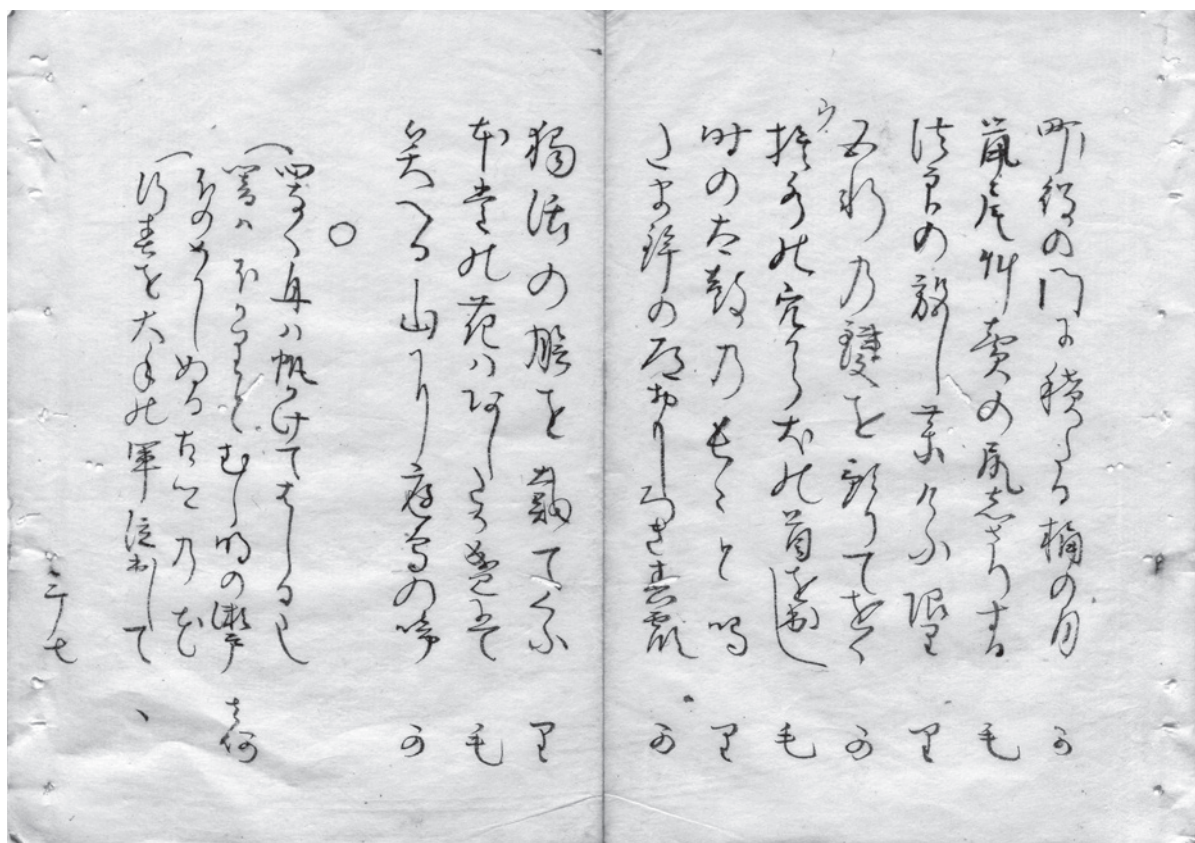
ばてれんの奴等覺悟の眼を閉て
 長官殿の馬は嘶く
 算盤橋に日を暮しけり
 までしばし月夜の花を手折べく
 蛙は友をよぶが役也
 名
 この頃は弥勒仏も暖に

関白さまの鐘が鏝あがる
 玉川のしる帷子を着つれ立
 紙の袋の覆盆子こぼる、
 さらくと掃除してをく後の朝
 踏ごたへなき夢のうき橋
 飛で来てそこら詠てとぶ雀
 野分氣しきの浜る雲

里毛か里毛、か 毛里か毛、里か

(七四才)

(七四ウ)



町役の門に積たる桶の月

鼠尾草売の尻しさりする

法印の施し葉けふ限り

五軒の鍵を預りてをく

捨水の穴から犬の首を出し

時の太鼓の長々と鳴

たま鉾の道おもしろき春霞

独活の膾を戴てくふ

本堂の花はあしたが盛にて

笑へる山に庭鳥の啼

○

心なく舟は帆かけてはしる也

闇はほかりとむし明の瀬戸

ほのめかしぬる古郷の花

行春を大手の軍泣出して

去何

か 毛 里 か 毛 里 か 毛 里 か

(七五才)

(七五ウ)

屏風の奥に観音ましゝて
 往生人の杖をいたゞく
 八坂あたりの春の賑ひ
 うつかりと銀預りて目も合ず
 四月の蚤のぞんざいに飛ぶ
 奥がたの被は風にひるがへり
 こゝろの猿を静めかねつ、
 暁ヶちかく俵ほつりて縄をなふ、

月うすゝとふりみふらずみ
 女郎花しのぶの乱わづらふて
 やよまつ虫もまつが花かよ
 髭剃たれば足の痺れる
 花見にと佐川田喜六誘はれて、
 長浜安藤氏初会に
 はつ蟬や調べてのぼる庭の松
 正木のかづら長くつたはれ

屏風の奥に観音ましゝて
往生人の杖をいたゞく

去何

八坂あたりの春の賑ひ

うつかりと銀預りて目も合ず

四月の蚤のぞんざいに飛ぶ

、

奥がたの被は風にひるがへり

こゝろの猿を静めかねつ、

暁ヶちかく俵ほつりて縄をなふ

、

月うすゝとふりみふらずみ

女郎花しのぶの乱わづらふて

やよまつ虫もまつが花かよ

邦お
去何

髭剃たれば足の痺れる

花見にと佐川田喜六誘はれて

、

長浜安藤氏初会に

はつ蟬や調べてのぼる庭の松

正木のかづら長くつたはれ

此得
去何

(七六才)

(七六ウ)

月のまぎれよつとる雪
 ぶつくと泡吹上る茎の桶
 柴頭までが無言でぞおる
 日がしらの方から花の匂ひ来る
 魚もこの頃つるむそう也
 化に咲花かと心うたがはれ
 草をちぎりて流す山川
 うやむやの関は狐のはしる方
 擁護あらしめ玉津しま神
 母のためよむ七もじを置かねて
 椽の涙の草摺をうつ
 鶏の声のんどりと唄ひ出し
 みんなの衆が袴きらるゝ
 蠟燭の心さる男鹿相して
 日本一の上首尾の恋
 雁啼わたる月の山ぎは
 ふる郷やへちまの皮とおもへ共

去何

塘里

か

里

か

芦水

里秋

去何

(七七才)

此得

邦お

去何

梢舟

去何

舟

か

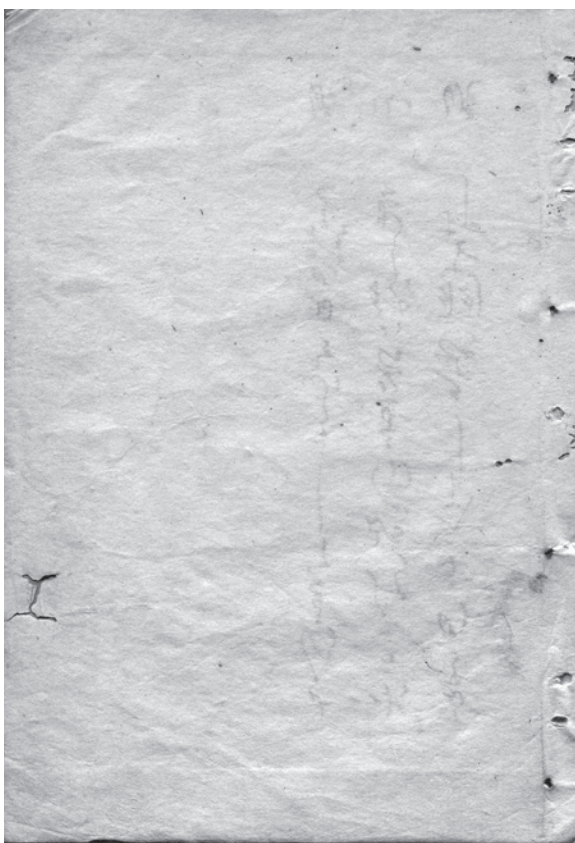
里秋

去何

里秋

去何

(七七ウ)



(二卷・裏表紙見返し)



(二卷・裏表紙)

俳人名索引

あ

蛙声いあせ 寛政年中。比叡山の人。

二四才

倚川いんせ 天明年中。

二五才

引牛きいん 享和年中。

野村氏。通称、九郎兵衛。近江国大上葛籠の人。蝶夢門。

六五才

雨篁うこう 天明年中。

京都の人。蝶夢門。

一才・一〇才

雨石きうせ 天明年中。近江国粟津の人。

五才・一八才

応澄ちよう 寛政年中。

若山氏。通称、治助。近江義仲寺前に住。

七才

温中ちん 文化年中。

近江国愛知川の人。

五四才・七〇才

仮興かきう 享和年中。

西沢氏。通称、甚五左衛門。近江国愛知川宿本陣の人。蝶夢門。

門。

一六ウ・二五ウ

瓦全かぜ 延享元（一七四四）年～文政八（一八二五）年十一月二七日。

柏原氏。名、仍員。字、子由。別号、鳩篋斎。京都の扇商。

蝶夢門。五升庵二世。伴蒿蹊に国学を学ぶ。

一七才・二四才・三三才

瓜泥いかで 文化年中。

鈴木氏。通称、太郎兵衛、曹溪。近江国膳所藩士。

三ウ・一七才・一七ウ・一九才・四〇ウ・六八ウ

鹿古こか 寛政年中。

浅野氏。別号、園亭。加賀金沢の人。關更門。

四八才・五〇ウ

卷阿なかん 天明年中。江戸の人。

六ウ・七才

其環きかん 享和年中。近江国長浜の人。

五七ウ・七〇ウ

菊二きく 延享二（一七四五）年～文化一二（一八二五）年九月五日。

一説に、文化一三年九月七日、七一歳没。逆算すると延享三年生。

年生。

井口氏。一説に、木村氏。名、保孝。通称、木綿屋喜兵衛。

別号、竹雨、猛虎、吞湖堂、萼緑華軒。墓所、大練寺。大津

榊屋町に住、車道に隠居。近江国大津の人。蝶夢門。追善集

『後のかなし文』（去何編）。

一才・八ウ・一七才・二四ウ・六九才

几董きとう 寛保元（一七四二）年～寛政元（一七八九）年一〇月二三日。

高井氏。名、小八郎。別号、雷夫、晋明、春夜楼、塩山亭、

三世夜半亭など。剃髪して詐善居士。京の人。蕪村門。追善

集『鐘筑波』、『この時雨』、『雪の光』、『夢の猪名野』。

二三才

其白くは 寛政年中。丹後国峰山の人。

一三ウ・一六ウ・二一ウ・二三才

沂風^{きふ}／得往^{とく}／方広^{ほうこう}

宝暦二（一七五二）年～寛政一二（一八〇〇）年四月三〇日。

塩路氏。名、琳澄。字、得往。別号、爾時庵。紀伊国日高郡御坊の人。僧侶。蝶夢門。安永六年、義仲寺無名庵六世。

『爾時庵発句集』がある。

一ウ・四ウ・六オ・一四オ・一七ウ・一九オ・三三ウ・三三オ・

三四オ・三九オ

九臯^{きゅう} 慶応年中。

中小路氏。通称、伝兵衛。別号、祥声庵。近江国の人。

二四ウ

暁台^{きょうたい} 享保一七（一七三二）年～寛政四（一七九二）年一月二〇日。

加藤氏。名、周拳。通称、平兵衛。別号、他朗、買夜、暮雨

巷。尾張名古屋の人。巴雀、白尼門。安永九年、近江国の幻

住庵に入る。二条家俳諧、花の本宗匠。追善集『落梅花』

（臥史編）。

二四ウ

去何^{かきよ} 宝暦元（一七五二）年～文化一三（一八一六）年五月三日。

渡辺氏。通称、甚介。名、栄。のち朗。字、明夫。別号、古

巢園、虚庵。法号、禅定院虚庵宗空居士。近江国東浅井郡高

田（速水村）の村長。蝶夢門。追善集『種栗』（「三栗記」）を

収める。槐菴編）。

一オ・三ウ・四ウ・六オ・七ウ・八オ・八ウ・一〇オ・一二ウ・

一三オ・一四オ・一七オ・一七ウ・二〇ウ・二二ウ・二四オ・

二五ウ・二八オ・二八ウ・二九ウ・三二ウ・三三オ・三四オ・

三四ウ・三七オ・三九オ・四〇ウ・四二オ・四四ウ・四五オ・

四七ウ・四八オ・五〇ウ・五一オ・五三ウ・五五オ・五六ウ・

五七オ・五九ウ・六〇オ・六一オ・六一ウ・六四オ・六四ウ・

六五オ・六七オ・六八ウ・七一オ・七一ウ・七三オ・七五ウ・

七六オ・七六ウ・七七オ・七七ウ

巨洲^{きゅうしゅう}（州） 寛政年中。

伊東氏。通称、勘三郎。近江国大津の人。別号、春草舎、松

湯亭、停雲居。雲裡門。

一七オ

邦雄^{はなのおくに} 文化年中。

安藤氏。近江国長浜の人。蝶夢門。

五一オ・五五ウ・五六ウ・五七ウ・七〇ウ・七六ウ・七七ウ

月川^{げんせつ} ？～寛政一二（一八〇〇）年四月二〇日。

別号、其由、榎室、榎堂。武蔵国葛飾に住し、夏目成美と親

交。近江国多賀神社の造営のため遊歴する。

二三ウ・三七オ・四二オ・四四ウ・五一オ・五三ウ・五七オ

幻阿^{あげん} 蝶夢^{うむ}を見よ

效枝^{こうし} 寛政年中。京都の人。

三三オ・三四オ

呉琴^{ごきん} 寛政年中。近江国蚊野の人。

七ウ・二三オ

跨山^{こさ} 文化年中。

福田氏。名、徳操。別号、李庵。丹後宮津の人。宮津藩医。

一二オ

呉天^{こんて} 文化年中。近江国長浜の人。

五一オ・五五ウ・五六ウ・五七ウ・七〇ウ

五来いこら 宝暦九（二七五九）年～天保九（二八三八）年七月八日。

福田氏。通称、九郎右衛門。別号、申斎、清風庵。近江国大津米屋町住。米商。蝶夢門。二四ウ

さ

三敲こう 寛政年中。京都の人。二四ウ

紫暁しぎよ 延享元（二七四四）年又は同二年～文化元（二八〇四）年から同三年か。

宮氏。別号、聴亀庵、几董の春夜楼を継ぐ。京都縄手通りの茶屋の主人。二四オ

紫虹しこう 寛政年中。五七オ

此得くしと 享和年中。近江国長浜の人。

四五オ・四七ウ・五一オ・五四オ・五五オ・五六ウ・五七オ・六一ウ・六四オ・六七オ・七〇ウ・七六ウ・七七ウ

士篤しと 享和年中。

若林氏。通称、又兵衛。近江国膳所藩士。六八ウ

支百しひ（白） 寛保二（二七四二）年～寛政四（二七九二）年。

五寶氏。通称、十右衛門。字、泰臨。別号、仰止亭。丹後国熊野郡湊の人。蝶夢門。一三オ

髭風うしふ ？～文化六（二八〇九）年二月九日。

福井氏。通称、八郎左衛門。但馬国豊岡の人。蝶夢門。妻、恒女。一オ・五オ・六オ・七ウ・一〇オ・一七オ・一七ウ

志風うしふ 寛政年中。筑前の人。一三オ

師由うしゆ ？～文化七（二八一〇）年。

西沢氏。通称、五郎助。近江国神崎越川の人。蝶夢門。

重厚じゆう 元文四（二七三九）年～文化元（二八〇四）年一月一八日。七ウ・二五ウ・三五オ・五四オ・六五オ

井上、菅原氏。法名、桃青院。墓所、近江国大津馬場墓地。

京都の人。梶井門室の家司。蝶夢門。明和七年、去来の落柿舎を再興。寛政四年、義仲寺に入る。二三オ、三二ウ

朱山しゅさん 享和年中。近江国長浜の人。六二オ・六四オ

春枝しゅし 天明年中。一三オ

梢舟しゅうしゅう 文化年中。近江国五坪の人。七七ウ

祥然しやうぜん 天明年中。近江国の人。二〇オ

如毛じようもう 文化年中。

後藤氏。名、徳郎。近江国多賀神社祠官。

二柳にじりゅう 享保八（二七三三）年～享和三（二八〇三）年三月二八日。三七オ・四二オ・四四ウ・五三ウ・六九オ・七三オ

勝見氏。名、充茂。墓所、大坂夕陽丘梅旧院。号、桃左、三四坊、不二庵、七杉堂など。加賀国山中の人。蝶夢門。二三ウ

青尙せいせい 元文元（二七三六）年～享和元（二八〇二）年四月二七日。小野氏。名、彦惣。諱、直方。法名、実明院真誓道達居士。

墓所、上白石町乗念寺。近江国蒲生郡牧村田中江村の支配役。蝶夢門。追善集『よるのうめ』（菊二編）。

三オ・一八オ・二四ウ

青蘿^{せいりや} 元文五（一七四〇）年～寛政三（一七九二）年六月十七日。

松岡氏、また武沢氏。通称、鍋五郎。別号、山李坊令茶、栗の本、幽松庵。播磨国姫路の人。のち加古川住。天明頃、蝶夢門。 一六ウ・二四ウ

青李^{せいり} 文政年中。伊賀上野の人。 三〇オ

草斧^{くさき} 寛政年中。 三二ウ

素兄^{いそけ} 寛政年中。近江国日野の人。 一六ウ

曾秋^{そうしゅう} 宝曆八（一七五八）年～文化一二（一八一五）年一〇月 二七ウ

二七日。

立川氏。名、政伸。通称、金右衛門、莊平、肥遯。別号、杉

風庵。近江国甲賀郡和田（油日村）の人。心学家。蝶夢門。

二三ウ・二八ウ・三〇オ

素寮^{そうりや} 天明年中。京都の人。 二五オ

た

太溪（泰溪）^{たいけい} 延享二（一七四五）年八月一三日～文化七（一八一〇）年一二月九日。

山本、平氏。名、順親。京都の人。菊亭今出川家諸大夫。安永五年、参河守。天明六年頃、重厚より落柿舎を継承。

二五オ

唾玉^{だぎょ} 文化年中。近江国粟津の人。

三二ウ

擔芝^{たんし} 文化年中。近江国長浜の人。

五七オ・六二ウ

蝶夢^{ちやうむ}／幻阿^{あげん} 享保一七（一七三二）年～寛政七（一七九五）年 一二月二四日。

法名、幻阿弥陀仏。墓所、京都阿弥陀寺。京都の人。別号、五升庵、泊庵。初め、俳諧を宋屋に学ぶ。義仲寺、落柿舎などを扶助し、芭蕉顕彰に尽力する。追善集『意新能日可麗』

『かなしぶみ』『後のひかり』。

六オ・七ウ・八オ・一〇オ・一二オ・一三ウ・一六ウ・一八オ・

二一ウ・二五オ・二八オ・二八ウ・三〇オ・三四ウ・三七オ

知了^{ちりや} 文政年中。京都岡崎住。尼。 六七オ

椿華^{ちんか} 天明年中。 二四オ

恒女^{じつね} 文化年中。

福井氏。但馬国豊岡の人。夫、髭風。 五ウ

杜音^{とん} ？～文化三（一八〇六）年一月一七日。

富田氏。名、彦六。伊賀柘植の人。蝶夢門。

七ウ・二八ウ・二九ウ

塘雨^{とうう} 寛政年中。京都の人。 一七オ

東走^{とうそう} 文政年中。

通称、骨柳屋治兵衛。但馬国豊岡の人。蝶夢門。

七ウ・二五オ・六九オ

東陌^{とうはく} ？～天明元（一七八二）年六月二二日。

別号、菊巴亭。丹後宮津の人。追善集『浦の月』（天明元年

刊）。 一二ウ

塘里とうり 文政年中。

曾我氏。名、一郎次。別号、幽篁亭、喜雨亭。近江国犬上土田の人。昼寝塚社（文政一二年）。

八才・一七才・二四才・三七才・四二才・四四才・五三才・六一才・六四才・六五才・六七才・七〇才・七一才・七三才・七七才

得往とくわう 沂風ひふうを見よ

な

若翁わくお 天明年中。

は

巴橋うははし 天明年中。

麦字うばく ？文化一〇（一八二三）年二月二七日。

赤松、寺沢氏。名、友幸。京都の人。江戸住、書籍商。蝶夢門。画を能くする。画名、晚翠。一二才・一三才

馬吹うばす ？文化九（一八二二）年八月一日。

木下氏。通称、若狭屋利兵衛。法名、萩岳浄栄居士。別号、波岐亭。丹後宮津の人。墓所、宮津国清寺。一二才

巴川うはせ 寛政年中。京都の人。

馬瓢うばひょう 享保一七（一七三三）年～享和元年（一八〇二）七月一日。

中西氏。通称、治右衛門。別号、醉茶亭。近江国愛知郡平尾村の人。農業。蝶夢門。遺文『筆の塵』編。一四才

巴陵うはりょう 寛政年中。京都の人。

半桂はんけい 天明年中。

飛川ひひせ 寛政年中。

深山氏。通称、倉橋屋長右衛門。別号、如雲窟、菊翁。近江国彦根下本町の人。有中門、蝶夢門。七一才

百尾ひゃくび ？文化一〇（一七九八）年六月二五日。

木下氏。名、長兵衛。通称、湊屋五兵衛。法名、一叟了白庵主。別号、橘中亭。丹後国宮津の人。墓所、宮津国清寺。

布舟ふふし 享保一九（一七三四）年～文化五（一八〇八）年九月二日。

田中氏。名、左太夫。通称、鍵屋孫右衛門。法名、敬空宗君

布舟居士。別号、暮桜亭。播磨国高砂の人。材木町住。酒造業。俳諧を布仙に学ぶ。後、二条家俳諧に青蘿とともに列する。一六才・二四才

浮流うりゅう ？文化二（一七八二）年五月二八日。

青山氏。別号、長者坊、宝瑟。三河国赤坂の人。伊賀国友ノ村常録寺大師堂住。蝶夢門。七才

文耕ぶんこう 天明年中。近江国の人。

蚤山ぶんざん ？天明七（一七八七）年一月一日。

松永氏。墓所、京都寺町天性寺。京都の人。別号、雄飛堂。

蕪村門。二〇才

蚊山ぶんざん 寛政年中。近江国膳所の人。四〇才

北至^{ほくし} 寛政年中。加賀国金沢の人。 六〇才
凡十^{じゅう} 文化年中。

串田氏。名、弥助。別号、梧亭。安芸国広島藩士。蝶夢門。
二三ウ

ま

木姿^{もくし} ? 寛政一一(二七九)年。

通称、六兵衛。但馬国豊岡の人。蝶夢門。 二三才・二八才

鳴泉^{めいせん} 天明年中。 二五才

ら

關更^{かんこう} 享保一一(二七三)年 寛政一〇(二七八)年五月三日。

高桑氏。名は、忠保、正保。別号、蘭臯、半化房、二夜庵、

桃亭、南無庵、芭蕉堂一世など。墓所、洛東高台寺。加賀国

金沢の人。医を業とする。俳諧を希因に学ぶ。後、洛東に芭

蕉堂を設え、毎年三月一二日に芭蕉追善の花供養会を催す。

二条家俳諧宗匠、花の本を蒙る。 二三ウ

蘭巴^{らんぱ} 天明年中。丹後宮津の人。 一二ウ

里秋^{りしゅう} 享和年中。

西沢氏。通称、莊左衛門。別号、蒼空。近江国神崎越川の人。

蝶夢門。

一二ウ・一四才・二四才・二五ウ・三四ウ・五三ウ・六五才・
七〇才・七七才・七七ウ

履道^{りどう} 天明年中。 二五才
鯉遊^{りゆう} 天明年中。

杓子屋五兵衛。近江国大津の人。蝶夢門。 九ウ・一九才
龍川^{りゅうせん} 寛政年中。近江国膳所の人。 二一才

路景^{ろけい} 文政年中。丹後国宮津の人。 一二ウ

露光^{ろくこう} 天明年中。近江国三井寺の人。 一七ウ

鷺十^{ろじゅう} 正徳五(二七五)年 寛政二(二七九)年。

惠乗和尚、丹後国宮津の真照寺七世。別号、劉曇淵、桃泉閣
主人、閑雲楼、閑亭主人。遺稿集『鷺十上人遺稿』。 一二ウ

芦水^{いろうす} 文化年中。

西村氏。通称、孝左衛門。別号、蝸牛庵。近江国神崎越川の
人。蝶夢門。 二五ウ・三四ウ・五四才・七〇才・七七才

参考文献

- 錫馬編
「五升庵道統系譜」
- 小室万吉編
『丹後俳人集』（一九三〇年十二月）
- 明治書院
『俳諧大辞典』（一九五七年七月）
- 高木蒼梧著
『俳諧人名辞典』（一九六〇年六月）
- 平林鳳二 大西一外著
『新選俳諧年表』（一九七七年一月）
- 西村燕々編
「近江俳人列伝」（一九七八年十一月）
- 義仲寺落柿舎刊
『時雨会集成』（一九九三年一月）
- 角川書店
『俳文学大辞典』（一九九五年一〇月）
- 図録
「時代鑑 俳人短冊譜 近世の裾野」（二〇〇九年三月）

付 記

本稿は、科学研究費助成事業「近世後期京都俳壇における芭蕉顕彰資料の収集と研究」（課題番号17K02474）の成果の一部である。

また、立命館大学アート・リサーチセンター 文部科学省 共同利用・共同研究拠点「日本文化資源デジタル・アーカイブ研究拠点」二〇一九年度共同研究「花供養をめぐる近世後期京都俳諧の研究」の成果の一部である。なお、成果の一部はweb公開中である。

<http://www.arc.ritsumeit.ac.jp/rarebook/2/3/post-48.html>

本稿を成すにあたっては、明治大学図書館の学恩を賜りました。記して深謝申し上げます。

渡辺去何編『古巢俳諧集』影印と翻刻

発行日 令和二年三月一日

編・著 立命館大学（非）講師
竹内 千代子

印刷 株式会社 昭英社

〒六〇〇八二九

京都市下京区五条通河原町西入本塩竈町五五八
電話 〇七五―三五一一―八一一



個人蔵 去何翁軸より